

# 「With/After コロナ」 の時代に向けて

— コロナ禍でみえた “ゆたかな暮らし” の新しいすがた —

2019年はラグビーワールドカップ。そして2020年はオリンピック・パラリンピックがやってくる！

わくわくしながら公開シンポジウムの構想を練っていたころ、2020年にやってきたのは新型コロナウイルスのパンデミックでした。私たちの日常生活は失われ、日常生活のアクセントとなるイベントも自粛や中止を余儀なくされました。

まったく先のみえない状況から、いまはコロナとの付き合い方を考えながら日常を取り戻す「With コロナ」の段階です。よりよく生きるための諸活動も徐々に再開しています。また、課題山積のコロナ禍だからこそ、新たな可能性に気付くことも多く、「ゆたかな暮らし」の新しいすがたがみえてきたと感じています。

サロン2002の会員・メンバーは異なる職種、地域で活動しながら、それぞれの立場でこの世界的な危機に直面しました。それぞれの経験や挑戦はかけがえのないものです。「With コロナ」で得られた知見を「After コロナ」にいかにつなげていくかを、皆さんとともに考えていきたいと思えます。

第1部では「イベント」を中心に、第2部では「新しい日常」を中心に、コロナ禍でみえた“ゆたかな暮らし”の新しいすがたを語ります。

オンラインで開催された公開シンポジウムをお楽しみください。

2020（令和2）年12月13日  
特定非営利活動法人サロン2002  
理事長 中塚義実

NPO 法人サロン 2002 公開シンポジウム 2020

# 「With/After コロナ」の時代に向けて

—コロナ禍でみえた“ゆたかな暮らし”の新しいすがた—

2020年は東京でオリンピック・パラリンピックが開かれる年でした。しかしやってきたのは「新型コロナ」。あらゆる場面でわたしたちの日常は失われ、いまも世界中で多くの人が苦しんでいます。

特定非営利活動法人サロン2002は、スポーツを通しての“ゆたかな暮らしづくり”を“志”とするNPOです。私たちは、「生きる」だけでなくともよいが、「よりよく生きる」には欠かせない文化としてスポーツやアートをとらえています。そして、「生きる」ためにこれらの文化的な活動が制限されるのはやむを得ないと考えてきました。

まったく先の見えない状況から、いまはコロナとの付き合い方を考えながら日常を取り戻す、「With コロナ」の段階です。「よりよく生きる」ための諸活動も徐々に再開しています。また、課題山積のコロナ禍だからこそ、新たな可能性に気づくことも多く、“ゆたかな暮らし”の新しいすがたがみえてきたと感じています。

登壇者はいずれもサロン2002の会員・メンバーです。異なる職種、地域で活動しながら、いずれも「新型コロナ」に向き合う1年を過ごしました。本シンポジウムでは全体を2部構成とし、前半は「イベント」を、後半は「日常生活」を中心に上げ、それぞれの経験を「After コロナ」にいかにつなげていくかを皆さんと共に考えていきたいと思っています。

公開シンポジウムは初のオンライン開催です。いつでも、どこからでもご参加いただけます。多くの方々にお集まりいただき、「After コロナ」の時代に向けた第一歩になれば幸いです。

特定非営利活動法人サロン 2002  
理事長 中塚義実

## 記

- 主催 : 特定非営利活動法人サロン 2002  
 日時 : 2020(令和2)年12月13日(日)  
 第1部 : 10:00～12:00(9:45から入室可能です)  
 第2部 : 16:30～18:30(16:15から入室可能です)  
 懇親会 : 18:30～20:30 (オンライン懇親会)  
 会場 : Zoomを用いたオンライン(それぞれの居場所から参加できます)  
 ※参加申込いただいた方に前日までにZoomのURLをお送りします。

## 演者とトピック :

### 第1部 コロナ禍でみえた“ゆたかな暮らし”の新しいすがた—「イベント」を中心に

- 10:10～10:35 宇都宮徹壺(写真家・ノンフィクションライター) … スタジアムからみえるもの  
 10:35～11:00 土谷 享(現代アートユニットKOSUGE1-16) … まつりとアートとスポーツと  
 11:00～11:25 本多克己(NPOサロン副理事長) … U-18フットサルからみえるもの  
 11:25～12:00 クロストーク

### 第2部 コロナ禍でみえた“ゆたかな暮らし”の新しいすがた—「新しい日常」を中心に

- 16:40～17:05 田中理恵(会社員/「リモート旅行部」共同主宰) … 働き方の変化とリモート旅行の試み  
 17:05～17:30 春日大樹(某日系総合電機メーカー上海支社所属) … 海外勤務で感じたこと  
 17:30～17:55 岸 卓巨(A-GOALプロジェクト代表/NPOサロン事務局長) … 休み時間はアフリカに  
 17:55～18:30 クロストーク  
 コーディネーター 中塚義実(NPOサロン理事長/筑波大学附属高等学校)

- 参加費 : 無料  
 参加申込 : 下記アドレスからご登録ください。  
<https://salon20022012.peatix.com/>  
 問い合わせ : [salon2002.info@gmail.com](mailto:salon2002.info@gmail.com) (担当:岸卓巨)

## <特定非営利活動法人サロン 2002 とは>

特定非営利活動法人サロン 2002 は、スポーツを通しての“ゆたかなくらしづくり”を“志”とするNPOです。

全国各地にいる約100名のメンバーは、学校関係者、スポーツ指導者やトレーナー、スポーツクラブの運営に携わる方、フットサルや草サッカーの関係者、メディア関係者、サポーターやボランティア、スポーツ行政に携わる方や競技団体関係者、医者や弁護士、アーティストなど多種多様です。さまざまな角度からスポーツに携わり、“志”の実現に向けて活動する者で構成されるのが「サロン2002」です。

NPO 法人サロン 2002 の主たる活動は、2020年12月で通算290回となる月例会の開催と、その内容を軸とするホームページの運営です。2020年度の月例会はすべてオンラインで開催し、「新型コロナ」にどう向き合うか、「with コロナ」の時代に向けてをメインテーマに、メンバーがさまざまな話題を取り上げました。

公開シンポジウムは2001年度よりほぼ毎年行われ、人と情報の行き交う場として定着しています。今回は月例会の流れをくむ形で企画されました。

詳細はホームページ<<http://www.salon2002.net>> をご覧ください。

### < サロン 2002 公開シンポジウム >

- 2001 年度…FIFA コンフェデレーションズカップ総括
- 2002 年度…FIFA ワールドカップ総括
- 2003 年度…地域で育てるこれからのスポーツ環境
- 2004 年度…totoを活かそう!
- 2005 年度…クラマーさん、ありがとう!
- 2006 年度…2006 年ドイツで感じたこと
- 2007 年度…サッカー観戦を楽しもう! - スタジアム編
- 2008 年度…地域からみたJリーグ百年構想
- 2009 年度…2019 年ラグビーワールドカップを語ろう!
- 2010 年度…育成期のサッカーを語ろう!
- 2011 年度…高校サッカー 90 年史を語ろう!
- 2012 年度…U-18 フットサルを語ろう!
- 2013 年度…スポーツクラブの法人化を語ろう!
- 2015 年度…スポーツで“ゆたかなくらし”を!
- 2016 年度…日本サッカーのルーツを語ろう!
- 2017 年度…Before2002, After2020- サロン 20 周年記念
- 2018 年度…部活動を語ろう!
- 2020 年度…ラグビーワールドカップ 2019 を語ろう!

### サロン 2002 設立宣言

(2000年4月1日)

我々は、以下に「サロン 2002 の“歴史”」、「サロン 2002 の“志”」及び「サロン 2002 の“会員”」を述べるにより、ここにあらためてサロン 2002 の設立を宣言する。

#### 【サロン 2002 の“歴史”】

サロン 2002 は、社会学、心理学等の専門的立場からサッカーの分析・研究・報告に従事していた「社・心グループ」(財団法人日本サッカー協会科学研究委員会の研究グループの一つで、1980 年代後半からこの名称で活動)を前身とし、1997 年からは研究者という枠にとらわれない、幅広い人材によって構成されるゆるやかな情報交流グループ「サロン 2002」として活動を行ってきた。

#### 【サロン 2002 の“志”】

サロン 2002 は、サッカー・スポーツを通して 21 世紀の“ゆたかなくらしづくり”を目指すことを“志”とする。年齢、性別、国籍、職業、専門分野、生活地域などを超えた幅広いネットワークを築き上げ、全国各地にサロン 2002 の“志”の輪を広げ、大きなムーブメントとなることを目指す。

サロン 2002 の“志”を実現する上で、2002 年 FIFA ワールドカップ韓国/日本大会は大きな節目であると認識する。国内外の様々な人々と協力しながら、この世界的なイベントの“成功”に貢献するとともに、同大会後の“ゆたかなくらしづくり”のためにできることを考え、行動する。

#### 【サロン 2002 の“会員”】

サロン 2002 は、前項の“志”を同じくする人たちのゆるやかなネットワークである。

サロン 2002 の“志”に賛同した個人であれば、誰でも、“会員”となることができる。ただし会員は、サロン 2002 からの“Take”を求めるだけでなく、サロン 2002 に対して、また社会に対して何が“Give”できるかを常に考え、“Give and Take”の姿勢でいるということが前提である。

サロン 2002 は、会員に対して短期的な成果は求めない。長い目で見た“Give and Take”の関係が成り立っていればよい。即座のアウトプットが困難であっても、いずれ何らかの形での“Give”を考えている人なら“会員”となることができる。

# 「With/Afterコロナ」の 時代に向けて

—コロナ禍でみえた“ゆたかな暮らし”の新しいすがた—

2020/12/13 (日) 10:00~/16:30~



第1部 「イベント」を中心に  
宇都宮徹巻 (写真家・ノンフィクションライター)  
… スタジアムからみえるもの  
土谷 享 (現代アートユニットKOSUGEI-16)  
… まつりとアートとスポーツと  
本多克己 (NPO法人サロン2002副理事長)  
… U-18フットサルからみえるもの

第2部 「新しい日常」を中心に  
田中理恵 (会社員/「リモート旅行部」共同主宰)  
… 働き方の変化とリモート旅行の試み  
春日大樹 (某日系総合電機メーカー 上海支社所属)  
… 海外勤務で感じたこと  
岸 卓巨 (A-GOALプロジェクト代表)  
… 休み時間はアフリカに

主 催 : 特定非営利活動法人サロン2002  
日 時 : 2020 (令和2) 年12月13日 (日)  
第1部 : 10:00~12:00  
第2部 : 16:30~18:30  
懇親会 : 18:30~20:30  
(オンライン)  
各回15分前よりお入りいただけます。  
会 場 : オンライン (ZOOM)  
参加費 : 無料

参加申込 : 右のQRコード、  
または下記アドレスからご登録ください。  
<https://salon20022012.peatix.com/>  
事務局 : [salon2002.info@gmail.com](mailto:salon2002.info@gmail.com)  
(担当: 岸卓巨)



## 演者プロフィール

登壇者は全員、サロン2002のNPO会員またはネットワークメンバーです



◆宇都宮徹彦 (写真家・ノンフィクションライター)

東京藝術大学大学院美術研究科修了後、TV制作会社勤務を経て、97年にペオグラードで「写真家宣言」。以後、国内外で「文化としてのフットボール」をカメラで切り取る活動を展開中。著書に『ディナモ・フットボール』（みすず書房）、『股旅フットボール』（東邦出版）など。『フットボールの犬 欧羅巴1999-2009』（同）で第20回ミズノスポーツライター賞最優秀賞、『サッカーおくのほそ道』（カンゼン）で2016サッカー本大賞を受賞。近著『フットボール風土記』（カンゼン）。2016年より宇都宮徹彦ウェブマガジン（WM）を配信中。http://www.targma.jp/tetsumaga/

◆土谷 享 (現代アートユニットKOSUGEI-16)

2001年より土谷享と車田智志乃の美術家ユニットKOSUGEI-16として活動を開始。現在はこれまでの活動コンセプトを引継ぎ、土谷が代表として活動している。主な受賞歴「第11回岡本太郎現代芸術賞展」岡本太郎賞。主なアートプロジェクト 2016~19年「PLY MAKERS SENDAI」せんだいメディアアテック art node project、2018年「MΩCHI SCRAMBLE」高知県立美術館 等。主な個展 2012年「THE PLAYMAKERS」Mac Birmingham (英国) 等。主なグループ展 2010年「こどものにわ」東京都現代美術館 等。主な国際展 2005年「横浜トリエンナーレ」、2010年「あいちトリエンナーレ」、2019年「瀬戸内国際芸術祭」。



◆本多克己 (紳シックス/NPOサロン副理事長)

1999年に現役最年長サッカーライターの賀川浩と株式会社クラブハウス、2008年に株式会社シックスを設立。国内最大のフットサル大会「ホンダカップ」をはじめとしたサッカー、フットサル事業に取り組んでいる。神戸アスリートタウンクラブ理事長、オーキック理事長、一般社団法人日本フットサル施設連盟理事、元奈良女子大学非常勤講師。NPOサロン2002では、U-18フットサル、広報などを担当している。

◆田中理恵 (会社員/「リモート旅行部」共同主宰)

調査会社に勤務し、オフタイムは旅を楽しむ元ダイビングガイド。コロナ禍でオンライン会議三昧となったステイホーム期間中に、旅仲間がテレビ番組で「リモート世界旅行」のナビゲーターを務める姿を見て、5月から仲間たちとオンラインで観光地を楽しむ旅を始めた。最近のオンタイムは出社とリモートを併用しながら、様々な業種のコロナ禍の影響についてお聞きする日々。



◆春日大樹 (某日系総合電機メーカー 上海支社所属)

1991年生まれ、京都府出身、筑波大学人文学類、筑波大学大学院人文社会科学研究科修了。学部時代は筑波大学蹴球部(中塚理事長の後輩に当たります)に所属し、体育系学生に交じってサッカーに打ち込みつつ、専攻であるドイツ言語学を学ぶ。学部時代、大学院時代合わせて一年半ドイツに滞在し、現地アマチュアチームに所属しプレーしつつ、ドイツ語の研究に取り組む。2017年就職、1年目から海外営業部に勤務し、2019年より上海へ出向、現職に就く。20代にして居住国3か国目、コロナ下での海外生活について赤裸々にお話できればと思います

◆岸 卓巨 (「A-GOALプロジェクト」代表/NPOサロン事務局長)

公益財団法人日本アンチ・ドーピング機構で働くサラリーマン。元JICA海外協力隊ケニア隊員。新型コロナの影響を受け、準備を重ねてきた東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の延期が決まる中で、ケニアの貧困地域でサッカークラブを運営する知人からメッセージが入った。「コロナの影響で多くの住民が生活に困窮している」。5月16日にA-GOALプロジェクトを立ち上げ、アフリカ現地の地域スポーツクラブをハブに緊急支援活動を開始。ケニア・ナイジェリア・マラウイの3カ国で15のクラブと連携し、80名以上のプロジェクトメンバーとともに、7,000人以上に食糧や衛生用品を配布。9月末には支援金獲得を目的に24時間のオンラインイベントを開催し、オルンガ選手(柏レイソル)などアフリカ出身アスリートなど多数参加。活動は現在も継続中。今回のシンポジウムでは、「日常生活」の視点から怒涛の半年を振り返ります。



◆中塚義実 (筑波大学附属高校/NPOサロン理事長)

1987年の着任以来、同じ学校で保健体育科教諭・蹴球部顧問として高校生の指導に当たる。前身の「社・心グループ」時代からNPO法人化した現在に至るまで、サロン2002とともに歩みながら「スポーツを通しての“ゆたかなくらしづくり”」に取り組む。筑波大学オリンピック教育プラットフォーム(CORE)運営委員、日本部活動学会理事、日本ヤタガラス協会副会長、全国高体連研究部活性化委員、東京都サッカー協会フットサル委員会ユース(2種・3種)部会長など。著書に『少年のためのサッカー入門』(長岡書店)、『日本のスポーツ界は暴力を克服できるか』(かもがわ書店)、『運動部活動の理論と実際』(大修館書店)など。今回は、第1部をU-18フットサルリーグチャンピオンズカップ開催の長野県千曲市から、第2部を職場近くの東京都文京区から進行する予定です。



第5回U-18フットサルリーグチャンピオンズカップにおける動画配信の様子

## 第1部 「イベント」を中心に

10:10～10:35 宇都宮徹壺（写真家・ノンフィクションライター）… スタジアムからみえるもの

10:35～11:00 土谷 享（現代アートユニットKOSUGE1-16）… まつりとアートとスポーツと

11:00～11:25 本多克己（NPO サロン副理事長）… U-18フットサルからみえるもの

11:25～12:00 クロストーク

コーディネーター 中塚義実（NPO サロン理事長／筑波大学附属高等学校）

### 【参加者（会員・メンバー）22名】

浅見明子、安藤裕一、宇都宮徹壺、春日大樹、金子正彦、岸卓巨、北原由、小池靖、笹原勉、嶋崎雅規、白井久明、関秀忠、竹内佳久、田中理恵、張壽山、土谷享、中塚義実、徳田仁、野村忠明、本郷由希、本多克己、吉原尊男

### 【参加者（未会員）10名】

荒川浩幸（北海道フットサル連盟）、大友洋介、小沼浩栄（信州千曲観光局）、Yasuko Kusakari、Hiroshi Komatsu、Mizuki Takezaki、竹田憲一（NPO シブヤ大学）、中小路徹（朝日新聞）、原陽司（フウガドールすみだ）、村上史子、計32名

## <オープニング>

**中塚**：皆さんおはようございます。特定非営利活動法人サロン 2002 理事長の中塚と申します。サロン 2002 は、「スポーツを通してのゆたかなくらしづくり」を“志”に掲げる NPO です。法人化したのは 2014 年ですが、1997 年から「サロン 2002」を名乗って活動しています。前身の研究会はさらにその 10 年ほど前に始まります。1997 年から毎月開かれる月例会は、本日の公開シンポジウムで通算 290 回となります。毎月スポーツ、あるいは“ゆたかなくらし”に関わるトピックを取り上げ、いろんな人が出入りする、このようなネットワークです。

月例会の拡大版として年 1 回、公開シンポジウムを開いています。今年は、やはり何と言っても、とてつもなく大きな出来事だった「新型コロナ」ですね。どのように付き合っていくか、そしてこの先どのようになっているのかということも含め、「With/After コロナの時代に向けて—コロナ禍でみえた“ゆたかなくらし”の新しいすがた」というテーマを掲げ、午前中の第 1 部では 10 時から 12 時まで「イベント」を中心に、午後の第 2 部では 4 時半から 6 時半まで「新しい日常」を中心に、ということでお送りしてまいります。

初のオンラインでの公開シンポジウムです。一体どんなことになるかわかりませんが、まずは副産物として、いろんなところから参加できるという特徴がみられます。かくいう私はいま、1 月はじめに NPO サロン主催で開かれる U-18 フットサルリーグチャンピオンズカップの開催地である長野県千曲市にあります。信州千曲観光局が入る建物 2 階の一室です。

第一部は 3 人の演者にそれぞれ 20 分ずつお話し頂き、10 分の質疑応答。最後にクロストークの時間を設けるという形です。まず私の方からお名前だけ紹介しますので、一言ずつ自己紹介を頂き、中身に入りたいと思います。

最初は天皇杯の取材で大分にいらっしゃる、宇都宮徹壺（うつのみやてついち）さん。続いて青森の八戸にいらっしゃいます、土谷享（つちやたかし）さん。そして私の斜め向かいにいま座っておられます、本多克己（ほんだかつみ）さん。この順で自己紹介をお願いします。

**宇都宮**：はじめまして、こんにちは。写真家・ノンフィクションライターの宇都宮徹壺と申します。先程ご紹介ありましたが、本日は天皇杯の取材で大分に来ております。ちょうど時間的にホテルのチェックアウトになりまして、急遽口ビーでお話ししております。今日はよろしく願いいたします。

**土谷**：KOSUGEI-16 という美術家ユニットの土谷享です。八戸三社大祭の山車作りを応援するイベントを開催中、ということで八戸の複合文化施設に滞在しています。よろしく願いします。

**本多**：サロン 2002 副理事長の本多です。今日は中塚さんと共に長野の千曲市から、フットサルの大会を中心にお話しさせていただきます。宜しく願い致します。

**中塚**：諸注意ということで、オンラインならではのお願いをいくつかさせていただきます。記録について。記録用として主催者が録画しておりますが、映像を公開することはありません。著作権保護、および他の参加者の情報保護のため、記録行為を固くお断り申し上げます。シンポジウムの内容は活字にし、NPO サロンのホームページで公開し、広報誌にも掲載します。ホームページ上に名前を出したくない方は、その旨チャット機能でお知らせください。基本的にこの画面に写っている皆さんのお名前、氏名（所属）という形にして頂けるとありがたいです。皆さんの顔写真の右上の方の「…」をクリックしてもらえると、修正する場所が出てきます。発表中の音声や画像の件、ご確認ください。質問やコメントがあればまずはチャットでお示し頂けるとありがたいです。

ということで早速ですが、宇都宮さんの発表に入りたいと思います。なお宇都宮さんは、ご自分の発表と質疑が終わったところで取材の方へ移動されます。ではよろしく願いいたします。

# スタジアムからみえるもの

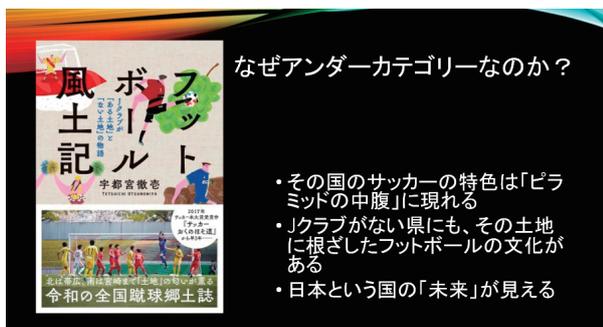
「アンダーカテゴリーから考える、ポストコロナのサッカー界」

宇都宮徹壺

**宇都宮**：中塚先生、ありがとうございました。宇都宮徹壺です。早速ですが画面の方を共有したいと思います。切り替わりましたでしょうか。

今日のテーマは「アンダーカテゴリーから考える、ポストコロナのサッカー界」。アンダーカテゴリーというのは正式名称ではなくて、私が都合上使っている言葉なんですけれども、要するにJリーグ以下のカテゴリーですね。J1、J2、J3、その下にJFLがあり、これを実質4部、その下に地域リーグがあり、さらに都道府県リーグがある。JFL以下のカテゴリーを「アンダーカテゴリー」とここでは定義したいと思います。

Jリーグが、色々とコロナ禍において観戦環境に制約を受けているという話は皆さんもご存知かと思います。逆にJFL以下のアンダーカテゴリーは、どのようなコロナの影響を受けてきたのか。あるいはその中でどういった新しい動きがあるのか、ということをお話したいと思います。



まず、なぜアンダーカテゴリーなのかというお話をしたいと思います。こちらが、11月13日に出版した『フットボール風土記』という、3年ぶりの書籍なんですけれども、この中でのお話します、福山シティFCであるとか、Criacao Shinjukuですとか、これまでの地域からJリーグを目指すという動きが色々変わってきている。そういった新しい世代の上を目指すクラブが、非常に面白い動きをしている、興味深い活動をしているということをお話したいと思います。

私は15年ぐらい、このカテゴリー取材しているんですけど、理由はいくつかあります。まず、そ

の国のサッカーの特色というのは、トップリーグを頂点とするピラミッドの中腹くらいに現れるという、確信めいた仮説に基づいて取材してきています。それともうひとつ、Jクラブがない県は今季は8つあるんですけども、Jクラブがない県にも、その土地に目指したフットボールの文化がある、ということを引き取り取材して伝えたいという思いがあります。

加えてひとつ、最近すごく感じているんですけども、実は日本という国の未来が、このカテゴリーに見えてくるんじゃないかという最近の新しい仮説があります。最近の上を目指すクラブには、「その土地の地域課題を解決する」ことに自分たちの存在意義を見出そうとする傾向が見られます。わかりやすいところであれば、少子高齢化とか人口流出とかですね。このカテゴリーを取材していると、日本という国の未来、あるいは課題といったものが非常に身近に感じることが多い印象があります。

さっそく、コロナ禍という観点からお話したいと思います。地域リーグからJFLを目指す大会に、地域チャンピオンズリーグ（以下、地域CL）というものがありません。全国に9つの地域があるんですけども、各地域リーグのチャンピオンと、全国社会人サッカー選手権大会を勝ち抜いた上位チーム（全社枠）が集う、12チームから上位2チームがJFLに参加する大会です。

この地域リーグのうち、北海道・東北・関東・北信越・関西・四国はリーグ戦が大体14試合とか、多くて18試合とかあるんですけども、前半がコロナ禍で試合ができなかったということで2回戦総当たりではなく1回戦総当たりでチャンピオンを決めることになりました。それはまだ良い方で、東海リーグと中国リーグは今年リーグ戦を行っていません。地域CLに出場するチームを決めるためのトーナメント、というのをやっています。

## 今年の地域CLはどんな影響があったのか？



- 北海道、東北、関東、北信越、関西、四国はリーグ戦を半分
- 東海と中国はリーグ戦を中止(トーナメントで地域CL出場チームを決定)
- 九州は途中で中止(昨年の1位と2位が出場)
- 全社は中止

こちらの写真は地域CLで2位になり、JFL昇格を決めたFC刈谷なのですが、彼らは今年公式戦トーナメント2試合だけを戦ってこの大会に出場しているんですね。非常にラッキーと言えるかもしれませんが、刈谷からしてみると非常に選手の見極めで、2試合しかやってないので、苦労したという話を聞きました。さらにもっとかわいそうなのは九州リーグです。九州リーグはコロナの感染拡大によって、途中でリーグを止めているんです。結局、九州リーグの去年の1位と2位を出場させています。このように非常に苦労した末に今年の地域CLが行われまして、JFLに昇格したのは関西リーグのFCTIAMO枚方、そして東海リーグのFC刈谷の2チームが、来季のJFLを戦うことになりました。



### 福山シティFC (広島県1部)

- 広島県1部所属(J1から6番目)
- 経営危機にクラブファンに対応
- SNSでブランド価値を高めている
- スポンサーは地域にこだわらない
- 現在、天皇杯4回戦に進出

ここからはいくつか『フットボール風土記』の中でも触れましたクラブが、コロナ禍をどう生き抜いて言ったか、という話に移りたいと思います。ちょうど今日、天皇杯4回戦が行われるんですけども、この4回戦を勝ち上がっている福山シティFC。このクラブは中国リーグのそのまた下、広島県1部所属です。J1から数えて6つ下の6部です。6部なんですけれども、写真にあるように、グッズをこれだけ展開していて、非常にブランディングが上手いクラブだと思います。ちなみにこのエンブレム、コウモリとバラが描かれています。福山市というのはバラが市の花になっていまして、あとコウモリ。実は福山という名前はコウモリ(蝙蝠)の蝠(福)に由来してまして、コウモリとバラをエンブレムに使いながら、ご当地感

をアピールしています。

県一部とはいえ、今年の予算は5千万円くらいを組んでいたそうです。ところがコロナ禍でスポンサーが、がんと抜けてしまった。いろいろ経費を切り詰めたんですけども、それでも限界がある。最後に彼らが試みたのがクラウドファンディングです。このクラウドファンディングで彼らは、わずか3日間で500万を集めたんです。最終的に800万円以上のお金が集まったんですけども、考えてみていただきたいんですけども、広島県1部です。誰も見たことがないチームで、それだけ下のカテゴリーなのに、これだけお金を集めてしまった。なぜだと思いますか？

まず、彼らはSNSでの発信に意識的なんですね。福山というのは、どんな土地なのか。クラブとしてどんな活動をしていて、どんなことを目指しているのか。そういったことを、地元以外のところにもどんどん知ってもらう努力をしている。これと関連してクラブは、福山のスポンサーにこだわらないということが挙げられます。

皆さんもご経験あるかと思いますが、コロナ禍の影響でリモートでの会議や営業が当たり前になりました。このシンポジウムもZoomを用いて行われているわけですが、もはや距離は関係ないし、福山に拘る必要もない。東京のスポンサーからお金を引き出して、それを福山に回していく考え方ができるんですね。ここが非常に今風だと思います。

フットボールに関して、このクラブはユニークです。先ほどもお話しましたが、福山シティは現在4回戦まで勝ち進んでいるのですが、チームを率いる監督は大卒1年目の22歳です。これはたまたまではなく、クラブが「選手ではなく指導者を育成する」というコンセプトを掲げている結果です。こういう明確なコンセプトを、県1部の段階から徹底させているところにも、令和の時代にふさわしいクラブづくりであると言えるでしょう。



### クリアソン新宿(関東1部)

- 関東1部所属(J1から5番目)
- 「多様性の街」のクラブとして
- 2025年に「世界一」を目指す
- プレーとビジネスは等価
- 練習場は？ スタジアムは？

続きまして、関東1部所属のCriacao Shinjukuと

いうクラブです。ついこの間、サガン鳥栖の小林祐三選手がJリーガーを辞めて、このアマチュアクラブに移籍することが話題になりました。もともと立教大学のサッカー同好会がスタートで、東京都4部からどんどん勝ち上がってここまで来ているんですけども、実際Jを目指すということを意識し始めた時に、ホームタウンをあえて新宿区に決めました。

ホームタウンの決め方というのは、いろいろあると思うんですけども、自分たちのクラブの理念、あるいはコンセプトに合致する東京の区はどこだということを探した時に、彼らは「多様性の街」というところで一番響く新宿を選びました。新宿といえば、まずは新宿駅の周りがまず思い浮かびますけれども、四谷、早稲田、神楽坂、落合、大久保、地域によって多様性があります。それともうひとつ、住んでいる人たちも多様性があります。だいたい人口の12%弱が外国籍の人だそうです。

多様性ということとは、バラバラということでもあります。地域もバラバラ、住んでいる人もバラバラ。そこに一体感をもたせるものが何かといえば、スポーツでありサッカーである。だからこそ、新宿にJを目指すクラブが必要なんだ、というのが彼らの考え方なんです。

もうひとつ、Criacaoがユニークなのは、サッカーとビジネスパーソンであることを等価で考えていることです。上を目指すアマチュアクラブの場合、よくあるのはスポンサーの会社に働いて、そこで生活費を稼いでプレーをしてもらうというパターンですね。Criacaoの場合は「株式会社Criacao」という会社がありまして、そこがサッカーチームを運営しているんですけれども、株式会社Criacaoの福利厚生のためにサッカーチームがあるのではない。

むしろ株式会社Criacaoでビジネスをちゃんとやる、サッカーもちゃんとやります、というクラブなんです。現在、キャプテンを務める井筒陸也選手は、2年前まで徳島ヴォルティスでレギュラーだったんですけど、ここでビジネスをやりたいから当時関東2部だったCriacaoに移籍しています。今度入ってくる、小林祐三選手もそうなるはず。昔だったらJリーガー、プロが一番偉いんだという考え方が一般的でした。今は違います。プロになるのが人生の最終目標ではなくて、サッカーを続ける意味を現役時代から突き詰めて考える選手が増えてきている。そうしたキャリアに合致した場を提供しているのもCriacaoの特徴であり、今後そうしたクラブが増えてくるかも

しれないですね。



新宿をホームタウンとする場合、ネックとなるのが練習場でありスタジアムです。ただしスタジアムに関しては、ポストコロナという観点から見ると、今後は発想そのものが変わっていく可能性というものを考える必要があります。そこで興味深い発言をしているのが、FC今治代表の岡田武史さん。8月にインタビューさせていただいた際、岡田さんは「コロナ禍の状況がしばらく続く」という前提で、このようなコメントをしていました。

今後、サッカーやスポーツの観戦スタイルは、新しいものと古いものが共存していくのではないかと。スタジアムで観戦するスタイルは当然あるんだけど、ソーシャルディスタンスを保たなきゃいけない、声が出せないという状況は続くかもしれない。むしろリモートの中で、移動せずに家の中で大声を出して応援するというのもありなんじゃないか。その2つの観戦スタイルが並列していく、という考え方ですね。

後者のスタイルが一般的になると、スタジアムの考え方も変わってきます。例えば5000人収容スタジアムなんだけれども、リモートでそのスタジアムで行われている試合がめちゃくちゃコンテンツの価値が高ければ、10万人が視聴するかもしれない。そしてその10万人がちゃんと視聴することで、ペイできるような新しいビジネスモデルが構築されるのではないかと。今までだと、例えばJ1は1万5千人収容、J2だと1万人収容というスタジアム基準があったんですけども、これは意味がなくなるんじゃないか。ということ、岡田さんは予言めいたことをおっしゃっていました。

つまり、このコロナ禍がずっと続く状況が続いたならば、Criacao Shinjukuのような考え方がむしろこれからのスタンダードになっていくのかもしれない。これが、今日のプレゼンでのひとつの結論です。とい

うことで、私のプレゼンはここまでです。何かご質問等あれば、コメント欄をお願いします。

**中塚**：どうもありがとうございました。宇都宮さんからは、いわゆる「アンダーカテゴリー」の部分の長い年月かけてみてこられた中で感じたこと、取材を通して見聞きされたことを中心にお話頂きました。最後の話はスポーツだけでなく、例えば音楽イベントでも言えることですね。サザンのコンサートがリモート開催されて何万人も視聴する。新しいスタイルは十分成立するんじゃないかと思います。

皆さんから質問等ありましたらチャット欄、もしくはその場で挙手してもらっても構いません。最初にも言いましたが宇都宮さんはあと5分でご自身の取材の方へ行かれてしまいますので、聞いておきたいことがあれば今のうちです。

ではまず私の方から、質問というか感想も兼ねて一つ。やはりコロナ禍で、今まであまり気づいてなかったような、流れがちょっと変わってきてるなと感じます。例えば福山シティの話の中で、スポンサーは地域にこだわらず東京のお金を地方に持っていくという発想。かつて大分で溝畑さんが社長をされていた時に、中央のスポンサーを得ようとして、逆に地方から反感を買っていたという話を聞いたことがあります。例えばそういったところの流れが大きく変わりつつあるのかな、という気がしましたがいかがでしょうか。

**宇都宮**：このコロナによって、間違いなく地方と中央との距離は縮まったし、あまり距離が意味を持たなくなったというのはありますね。溝畑さんの頃ともうひとつ違うのはSNSの存在です。クラブ経営者、あるいはフロントがSNSで発信するようになったというのは、ここ最近の話ですが、もしあの時代にSNSがあって、溝畑さんが発信していたら、また違った展開があったんじゃないかとも思います。

ちなみに福山シティの場合、代表をされている方は岡本佳大さんは平成元年生まれの31歳なんですね。今はもう、そういう世代が上を目指すクラブの経営をしていると。このあたりにもう時代と言いますか、これからデジタルネイティブの世代が経営のトップに立っていくと、我々の常識を上回るような新しい展開が、どんどん見られるようになるんじゃないかと思います。

**中塚**：ありがとうございます。チャットの方にも続々

コメントが書きこまれています。もう一つだけ、張さんからの質問です。福山シティとかCriacaoのような例はまだ特殊なのか。彼らの理想を実現するのにあと何年ぐらい必要だと宇都宮さんはお考えですか。これをラストの質問にしたいと思います。

**宇都宮**：いい質問ありがとうございます。特殊ではないと思っています。今回紹介した福山シティやCriacaoを私は「第4世代」と呼んでいます。今後、上を目指すクラブというのは、この第4世代が主流となっていくのではないかと私は思っています。

では、第1世代から第3世代というのは、どのようなものか。まず、2002年ワールドカップ開催で「地元スタジアムができたから、Jクラブを作らしましょう」ということで生まれた、大分トリニータやアルビレックス新潟が第1世代。続いて、大分や新潟の成功事を受けて「わが県にJリーグを」という動きが全国に広がっていきます。これが第2世代。松本山雅ですとか、FC岐阜ですとか、V・ファーレン長崎ですとか、いまJクラブになっているところです。

第3世代というのは、そこからさらにビジネスとかブランディングに重きを置いているクラブです。FC今治や奈良クラブ、いわきFC。ここから、コロナ禍でさらに突き抜けた存在を第4世代と私は呼んでいます。「箱はありき、何それ？」とか「地方と首都圏の距離感、何それ？」という感覚ですね。今まで僕らが常識だと思っていたことを、どんどん突き抜けて突破していくような新しい時代。第4世代というのがこれから増えていくでしょうし、そこからこの上を目指すという意義ですとか、Jクラブになるところのハードルというのは、どんどん下がっていくんじゃないかなと考えています。

**中塚**：ありがとうございました。引き続き続々チャットの方にはご質問等いただいておりますが、可能であれば最後のクロストークのところで、いる方でディスカッションできればと思います。大事なテーマがいっぱい転がっていますので、また機会を見つけて取り上げていきたいと思っています。その前にぜひ、宇都宮さんの著書を皆さんお買い求めください。いろんな事例が載っておりますので。

今後のご活躍楽しみにしています。今日の取材も頑張ってください。

**宇都宮**：ありがとうございました。失礼します。

# まつりとアートとスポーツと

土谷 享

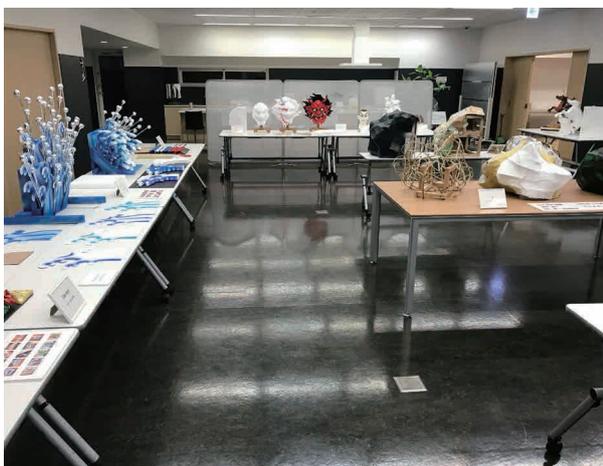
**中塚**：それでは二人目の話題提供者、土谷さんに移りますが、ここで改めて約束事を共有させてください。記録の方は今レコーディングさせてもらっています。それぞれでの記録行為をなさらないようお願いいたします。最終的に報告書、活字にまとめますが、活字になった段階で名前、所属を出したくない方はチャットの方でお知らせください。

土谷さんは、数日前から青森県八戸市に滞在されています。アートの観点から、生活をいかにゆたかにしていくかということで様々な試みをされていますが、八戸で一体何をされているのでしょうか。なお土谷さんのお住まいは高知県佐川町です。では土谷さんお願いします。

**土谷**：こんにちは。美術家ユニットのKOSUGEI-16の代表をしています土谷享と申します。今日は青森県八戸市にあります、「八戸ポータルミュージアム はっち」という複合文化施設から参加しております。この施設に滞在しながらイベントを実施しているのですが、八戸三社大祭というお祭りが毎年夏に開催されますけれども、その八戸三社大祭が培ってきた街の中でのコミュニティーづくりについて、非常に重要な機能を果たしている山車作りと言う文化を応援するようなイベントを、今この施設で行なっています。この取

り組みは確か5年ほど前から始まっているんですけども、私は3年前から関わらせて頂いています。ちょうど今、後ろの方でいろんな人が動いているんですけども、まさにここで今展示会をやりながら、今年度はお祭りそのものが中止になりましたので、ただその山車作りの文化を絶やすわけにはいかないということで、小学校の教育教材にするためのコンテンツを山車組のみなさんと約半年かけて準備してきました。その発表会ということで、今おこなっています。午後からは学校の先生も来られたりして、教材の使い方の説明会なども開催したりする予定です。スライドの方に移ろうと思しますので画面共有をさせていただきます。

今日は、中塚さんとお話して、「まつりとアートとスポーツと」というテーマでお話させていただきます。まず今冒頭に触れさせていただいた八戸三社大祭の山車というものはどのようなものか、ということのスライドで少しお話しします。この写真は去年の八戸三社大祭の山車の写真です。こういった高さが12メートルもある山車が27騎、毎年お祭りで街を練り歩きます。この祭りはこの山車作りを市民活動、市民の人達が手作りで行なっているということが最大の特徴のひとつだと思うんですけども、ねぶた祭りの



(展示の様子の写真)



(祭りの写真)

ようなねぶた師のようなプロフェッショナルが行っているのではなくて、水道屋さんとか電気屋さんとか、町内に住んでいる一般の人をはじめとして、お年寄りから子供までがこの部品を細々と作って、祭りに向けて2ヶ月くらいかけて制作をしていくわけです。

街の中に巨大な山車小屋が27箇所もあるということで、非常にユニークな文化がそこで生まれています。写真を見て分かると思うのですが、非常に派手な山車なんですけれども、実はデコトラのルーツにもなっています。デコトラは八戸の港から東京の築地まで運ぶトラックが、ピカピカさせながら走っていくわけなんですけれども、そのデコトラの運転手さんが実はお神輿で本当は行きたいくらいの気持ちらしいですね。そういった色々な文化にも反映されているくら

い鮮烈な山車が毎年練り歩きされています。(山車作りの写真) こういったように、この山車小屋の中では市民の人達が手作りで山車の部品を作っているんですね。山車を作る人たちを山車人と我々は呼んでいるんですけれども、私が一昨年開催したイベント、この八戸ポータルミュージアムはっちと一緒に開催したイベントはDASHIJIN プロジェクトと言います。このプロジェクトでは山車人の人たちと一緒に、もう少し参加の裾野を広げようという気持ちで、DASHIJIN LANDというちょっと移動式遊園地みたいなものを山車作りのオフのシーズンに行いました。この写真がその会場の様子の一部なんですけれども、山車の人たちとメリーゴーランド作ったりですね、屋台を作ったりしたわけなんです。



(DASHIJIN LAND の写真)

このイベントを開催するにあたって、まさに私が今ちょうど参加しているこの会場を使って、ここはアーティストインレジデンスという施設なんですけれども、芸術家やダンサーやミュージシャンなんかが八戸に滞在して制作をしていくという活動をサポートする

施設なんです。宿泊施設からお風呂やキッチンや工作室が備わっているんですけれども、この場所を使って山車組の人たちと一緒に「DASHIJIN LAND」というアミューズメントパークを作ってきました。

一般の、今までで山車組の活動に参加したかったけ



(食事の写真) (制作風景)

れども、なかなか参加する機会がなかったという人にも参加しやすいように、いろいろなコンテンツを用意してきました。こういった子供達も緩く作業に参加するというので、世代を超えたコミュニティがどんどん形成されていくわけです。この施設の向かい側に「マチニワ」という広場のような施設があるんですけども、そこを会場にして約半月間かけてこのイベントの準備を進めていました。山車人の方々は夜仕事帰りに集まって作業をすることがあるので、まあ活動の時間が夕方の6時から深夜12時ぐらいまでがこのDASHIJIN LANDの活動を準備する時間に充てられたわけなんですけれども、このアーティストインレジデンスのキッチンを使ってこういった炊き出しをしながら、みなさんと交流しながら、こういった日常生活の中に介在していく、というのが山車作りの非常にユニークなチャームポイントと言うか、大切なものなのかなと思っています。

ただ作るだけではなくて、こういった一緒にご飯を食べたりするということが、また世代を超えた交流を生んでいくというようなものにもなっています。山車を作るだけではなくて、こういったチョコバナナや山車は飾らないようないわゆるお祭りの子供達から人気があるような商品も、山車組の人たちの製作技術で作りたいめていきました。普段強面の親方にはこういった

型抜き屋さんとか、チョコバナナ屋さんとかそういった屋さんを演じていただいたわけです。この的屋をやっていく上で、お金で買えるわけではなくて、メリーゴーランドに乗ったり、それから山車作りにちょびっと参加できるような制作体験をすることによって、親方がその作ったものを審査してチョコバナナをもらえたり、たこ焼きをもらえたりするような交換を行いました。このかき氷も食べられるかき氷ではないんですね。みんなで作ったかき氷に真似た造形物なんです。この背後に見えるのが三社大祭の山車組のみなさんと一緒に作ったメリーゴーランドです。このメリーゴーランドは電気で動くのではなくて、自転車で動く仕掛けになっています。人力のメリーゴーランドなんですね。

この「DASHIJIN LAND」、昨年度も「DASHIJIN LAND 2」をやろうということで計画していた途中で、コロナ禍ということで3月にやろうとしていたイベント「DASHIJIN LAND2」が1月頃に中止が決定されて、昨年準備してきたものが全部白紙になってしまったんですけれども、3年目になる今年、今年もコロナ禍というものが継続されていくかもしれないということで、こういったアプローチで山車組の応援するイベントをやるかっていうところを準備してきたわけなんですけれども、八戸三社大祭本体のお祭りそのものが



(的屋の写真) (会場の様子)

中止が決定されてしまったという経緯もありまして、山車組の人達もお祭りではない新たな活動という所に踏み出せる機会にもなっていました。お祭り自体は300年以上続いているわけなんですけれども、この山車作りは実は毎年作って毎年壊すんですね。だから毎年毎年新しい山車を作っているんですけども、今年は新しい山車が作れなかったわけです。しかし100年前ぐらいの山車作りを見るとですね、和紙や竹や古い材料を使って大きな山車を作っている写真なんかが残ってまして。今の山車とは少し構成が変わっているんです。そういった山車をもう一度再現するような取り組みを山車振興会というお祭りに関わる本体の組織の方でされていました。そのお神輿の一部は新幹線の八戸駅の改札を出て右手側に1台展示されているので、もし機会があればご覧いただければと思います。それはその山車振興会の本体の方が行っていた活動なんですけれども、八戸ポータルミュージアムはっちとしては、教育コンテンツを山車組の皆さんと今年度は用意しよう、ということで準備してきました。八戸市民の人達にも、山車を見慣れているんですけど

も、実はこの山車がどんな素材でどういう工程で作られているのかということほとんどみんなわかっていないんですね。その山車組の人たちが製作しているプロセスを、順にわかるような教育コンテンツを今年度は用意してきました。(展示物から写真を引用) こういうデッサンから型紙を作って、主な素材は発泡スチロールなんですけれども、発泡スチロールをトレースしてこういった鬼ができていく。27個の山車組それぞれが同じやり方で作っているわけではなくて、それぞれ得意な工作方法があるんですけども、そういった工作方法を紹介するようなコンテンツを制作してきました。今僕の発表している後ろでこういった展示会が行われているわけです。今日も午後から学校の先生とか、もしかしたら子供達も来てですね、映像やスライドを使った教育教材の説明会が行われます。映像の方は大澤未来さんと言うドキュメンタリー映画監督の方に、山車組の工作のプロセスを取材してまとめて頂いたものになります。

もう一つ紹介させていただこうと思うのは等身大の紙相撲大会のイベントを私は15年ほど前から行っているんですけど昨年とから墨田区のイベントの中で「どんどこ！巨大紙相撲すみゆめ場所」というものを行っております。

これは昨年度の両国で開催された紙相撲大会のイベントです。

本物さながらにですね、タニマチさんを募って、懸賞品をもらえるような形で紙相撲大会を実施して行くんですけど、墨田区での紙相撲大会の一つの特徴は本物の相撲部屋さんが関わってくれているということです。昨年度は浦風親方さんが中心になって協力してくださったわけなんですけれども、今年度も大相撲協会の本体そのものも多くのイベントが中止していて、ちょっと暗い雰囲気があるので、是非この墨田区の紙相撲大会と一緒に取り組めるということは楽しみにしてくれているようです。ただしご覧のように密密なわけで。

これは今のコロナ禍においてこのイベントをすることは非常に難しいという課題があります。今実は準備しているのは完全にオンラインで行う準備をしていて、実際に今月の初めからワークショップが始まっているんですけど、その様子を説明させていただこうと思います。「どんどこ！巨大紙相撲北斎すみゆめ場所」という本場所は2月7日に開催される予定です。この2月7日に向けて墨田区内を巡業という形

でこの大会に出場するための力士を作るワークショップを4箇所で行うんですけども、通常でしたら私がその会場に行って皆さんを指導するわけなんですけど、それもできないということで完全にオンラインでワークショップを実施しています。大会そのものは本来ならば土俵をみんなで叩いてお相撲さん動かすんですけども、スマホやパソコンのタップやクリックで参加できるオンラインの土俵を動かす仕組みを作っています。実際にはこういったスマホの対応のホームページを立ち上げて、のこったのこったというところを繰り返してタップすることによって、それが土俵のハンマーユニットに連動して、これが動いて土俵を叩いていく、というちょっと見た目はユニークなちょっと滑稽なものになってしまっているんですけども、こういうユーモアも含めて現代アートの面白いところでして、こういう仕組みを今土俵の本体に備える準備をしています。

ワークショップそのものは繰り返しその力士制作というものを指導しなければいけないので、短い映像のツールを制作しまして、はじめの導入でこういった説明をしています。新弟子検査を通過することで本大会に出ることができます。この新弟子検査がある理由はですね、大きな土俵の上で二つの力士が組み合わさって行われるゲームなので、このゲームがうまく組み合わさってフェアにできるようにということでのルールになっています。この新弟子検査を通過させるための





# 「With/After コロナ」の時代に向けて 第1部

スタッフも必要になるわけですが、そういったスタッフは墨田区に住んでいる大工さんやアーティストにお手伝いいただいて、現地で計測をしていただいています。新弟子検査を通過すればこういう風に工作ができるわけです。で zoom を使って今ワークショップをやっているわけです。今年は「北斎すみゆめ場所」ということで、墨田区内には北斎美術館がありまして、生涯のほとんどを現在の墨田区で過ごした葛飾北斎の作品を多数所蔵しているんですけれども、そういった北斎の絵の中から相撲の絵も数多くありますので、そういった絵を参考にした会場作りをして、当日は両国

国技館のFM放送局、どすこいFMのアナウンサーや、今ちょっと実は2月7日にフジテレビの相撲トーナメントと重なってしまったので、相撲部屋さんの方の本物のスタッフの人の手配が今ちょっとどなたが来るか検討いただいているんですけれども、相撲トーナメント本体の方も密を避けるために全員参加というわ



どどこ！巨大紙相撲 力士制作解説（新弟子検査方法あり）



どどこ！巨大紙相撲 力士制作解説（新弟子検査方法あり）



けにはいかないで、誰か若い親方さんが空きが出るかもしれないということで、調整していただいているところです。実況解説から、呼び出し行司軍配それから弓取式までしっかり本物の人達と一緒に組んでいるイベントです。

少し次の第2部の方にもつながるようなお話を、こういう中塚さんからのオーダーもありましたので、コロナ自粛の間私の家族、子供たちも含めてどういうふうに高知県佐川町の田舎で過ごしていたのかということをお話しして終わりにしようと思います。高知県佐川町は高知県中山間地域にありまして、近くには仁淀川という日本で一番綺麗な川が流れています。ちょっとジョギングしながら桑の実を取っているところですけども、色々な自然の恵みに出会うことができます。うちの娘とこうやって桑の実を取ってきて桑の実ジャムを作ったり、それから海もそんなに遠くないのでこれはアジですね、アジをさばくことを子供達にも教えたり。このコロナ禍の間に、家事仕事や生きるための技術というものも少しずつ子供達にも色々と一緒に取り組むようなことをしてきました。これはベーグルを焼いています。うちの息子は0からベーグルを焼くのが非常に得意なんです。庭にレンガで窯を作りまして、ベーグルを焼いたりして作ることと食べることを合わせて楽しむようなことを積極的に取り組んできました。私は木を使った工作をたくさんやっているもので、うちの息子が興味があるということで電動工具の使い方を教えて、自ら工作技術が身につくような時間を作ってあげたり、これは私のアトリエの棚をうちの息子にデザインから制作まで全部お願いして作ってもらったものです。こういった形で生活の中でこれから彼らにも有効に役立つだろうなと言うことに多くの時間を使って過ごしてきました。第2部での発表も非常



に楽しみにしています。これでスライドは終わりにします。

**中塚**：どうもありがとうございました。八戸で何をやっているのかというところから、どんどん大相撲。この話は別の所で聞いた方もおられるのではないかと思います。それがリモートでいまだんなことになっているのか。そしてさらに、第2部の日常生活に繋がっていくような話題で、佐川町での土谷さん周辺の様子を、本当に導入のところだけですがお聞きしました。



時間がありませんので最後のクロストークでディスカッションできればと思いますが、1つだけ。27台の山車という話がありましたが、この山車を作る単位が27地区あるのですか、それとも山車を作ることによって地域の人が共有意識と言うかそういうものを持っているのでしょうか。つまり、山車作りによって地域が育まれるのか、地域ごとに山車を作っているのか、そこだけお聞きしたかったのですが。

**土谷**：そもそも町内の27の地区、厳密に言ったら27地区とは言えなくて、任意のグループもあったりするのですが、20以上の地区が山車小屋を持っていたということです。その山車小屋の母体となっているのは消防団とかですね、明治時代の火消さんの屯所での活動がベースになって発達してきた経緯があります。

**中塚**：ありがとうございます。もしかすると地方都市においては過疎化によって、元々あった地区自体が存在し得なくなってくる状況もあるかもしれません。その辺りも含めて最後に全体でディスカッションできればと思います。土谷さんどうもありがとうございました。

では3人目、私の斜め向かいにいま座っている本多さんです。諸注意のスライドも、改めては出しませんが、皆さんよろしくお祈いします。発言中は音声をオフにしてほしいのですが、画像の方はむしろオンにしてもらう方が、しゃべる方もみなさんの様子がわかって話しやすいので、よろしかったら顔出ししてください。では本多さんよろしくお祈いします。

# U-18フットサルからみえるもの

本多 克己

**本多**：本多です。よろしくお願ひします。皆さん顔出しありがとうございます。コロナのためにイベント、大会といった人が集まる機会が失われて厳しい状況ですけれども、まさにこのサロンのシンポジウムのように、今までは東京でみんな顔を合わせて集まる形では参加できなかったものが、今日は九州から八戸から、そして私たちは長野県千曲市からということで、今までには考えられなかったような新しいことが実現しています。これはうれしいことです。そんな中で、今まさに長野で準備している大会を中心に話をさせていただきます。

2000年ごろ～ 東京都で大会開催、リーグ設立。U18世代のフットサルが活性化。

2010年 ホンダカップでU-18カテゴリーを新設  
(優勝は名古屋オーシャンズU-18)

2012年 **U-18フットサルトーナメント  
2012**

9地域の代表による全国規模の大会開催  
(優勝は名古屋オーシャンズU-18)



2012年決勝 オーシャンズ vs 作編

2013年 第2回大会会場にてサロン2002公開シンポジウム  
「U-18フットサルを語ろう！」を開催

2014年 JFA主催の「第1回全日本ユース(U-18)フットサル大会」

2015年 U-18フットサルトーナメントを継承し、主催：日本フットサル連盟  
共催：サロン2002で「ユースフットサル選抜トーナメント」を開催

2017年 サロン2002主催「U-18フットサルリーグチャンピオンズカップ」を開催

この大会を機に各地にU-18リーグが整備され、日常的にフットサルを楽しめる環境が整備されていくことを願う。

U-18世代のフットサルとサロン2002は、非常に深い関係にあります。まず2000年頃からサロンメンバーの中塚さんや徳田さんなどが中心になって東京都で大会を開催、早くからリーグが設立されて活動が進んでいました。私がサロンではなくて民間企業でビジネスとして運営しているホンダカップでも2010年にはU-18のカテゴリーを作りました。そうすると全国にフットサルをプレーしている高校生がたくさんいることがわかり、大会を目指して来てくれる姿を見ながら、中塚さんと「そろそろU-18の全国大会がほしいですね」ということでJFAの方とご相談しました。JFAとしてすぐに主催大会を作るのは難しいので、協会の外に大会を作って、それをオフィシャルにしていけるのいいだろう、ということで2012年に「U-18フットサルトーナメント」として、オーシャンアリー

ナで大会を開催しました。スライドの写真が決勝の名古屋オーシャンズと作陽高校です。延長戦にもつれ込む本当に素晴らしい試合で、オーシャンズが優勝しました。この試合を見て大会をする意義があったと感じましたし、これからしっかり大会を作っていかなければという思いを強くした大きなきっかけになりました。翌年には大会会場で「U-18フットサルを語ろう」というテーマでシンポジウムを開催し、JFAの松崎さん、JFFの大立目さんにも参加いただきました。JFAの公式大会ができるまでは5年ぐらいかかるんじゃないかという話でしたが、その翌年にはJFA主催の全日本ユースが設立されました。その後「フットサルトーナメント」は日本フットサル連盟の主催になって、ユースフットサル選抜トーナメントと名称を変更。サロン2002としては自分たちの仕事ひとまず終えたのではないかと考えて、次は各地に日常的にフットサルをできるリーグ環境を作ってもらうことを促すために、リーグチャンピオンの大会を設立しました。



## GAViC CUP ユースフットサル選抜トーナメント

2012年に「U-18フットサルトーナメント」として創設。

2015年からは名称を変更し、一般財団法人日本フットサル連盟主催、サロン2002共催(2017年まで)で、全国9地域から選抜された12チームで開催。2018年度以後は開催なし。

2012年 名古屋オーシャンズU-18(愛知) / オーシャンアリーナ

2013年 瀬戸内高校(広島) / オーシャンアリーナ

2014年 幕張総合高校(千葉) / 駒沢体育館

2015年 愛知県選抜U-18 / 墨田区総合体育館

2016年 U-18新潟県選抜 / 墨田区総合体育館

2017年 U-18新潟県選抜 / 墨田区総合体育館

2018年 U-18神奈川県選抜/和歌山ビッグホエール

ユース選抜は2015年からフットサル連盟の主催になり、フットサルメーカーのGAViCがスポンサーについて、totoの助成金も確保できて、ということで軌道に乗ってきたのでサロンとしては運営主体から外れましたが、スポンサーが降りたというような事情もあって、2018年以降は開催なし、昨年今年も開催なしということになっている状況です。

## サロン2002 公開シンポジウム 『U-18フットサル』を語ろう！

主催：スポーツ文化研究会「サロン2002」

協力：一般財団法人日本フットサル連盟

日時：2013（平成25）年3月30日（土）

会場：テパオーシャンアリーナ  
※「U-18フットサルトーナメント2013」の試合後に開催。

演者：松崎 康弘（日本サッカー協会常務理事・フットサル委員長）  
大立目 佳久（日本フットサル連盟専務理事）  
岩本 芳久（熊本県サッカー協会フットサル委員長）  
中塚 義実（サロン2002理事長／東京都サッカー協会フットサル委員／筑波大学附属高校）

2013年に開催されたシンポジウムです。当時 JFA 常務理事でフットサル委員長であった松崎さん、フットサル連盟専務理事の大立目さんにも参加していただき、この世代のフットサル大会を作る、リーグ戦も作る、さらには代表の強化とところまで含めてやっていこうではないか、というような話がされました。



### 全日本ユース(U-18)フットサル大会

日本サッカー協会主催の大会として全国9地域で予選を開催。世代No.1決定戦となっており、高校サッカー部が多数出場。

2014年 聖和学園FC (宮城) / 太田区総合体育館、墨田区総合体育館  
2015年 岡山県作陽高校 (岡山) / ゼビオアリーナ、仙台市体育館  
2016年 帝京長岡高等学校(新潟) / ゼビオアリーナ、仙台市体育館  
2017年 矢板中央高等学校 (栃木) / ゼビオアリーナ、仙台市体育館  
2018年 帝京長岡高等学校(新潟) / ゼビオアリーナ、カメイアリーナ仙台  
2019年 ペスカドーラ町田U-18 (東京) / 浜松アリーナ  
2020年 新型コロナウイルス感染拡大のため開催されず

※年/優勝チーム/会場

その翌年に全日本選手権ができました。JFA が主催する日本一決定戦です。この優勝チームを見ていただいたらと分かる通り、ずっとサッカーの強豪校がフットサルにも取り組んで優勝する、という流れが続いていたんですけれども、昨年になってようやくフットサルクラブのペスカドーラ町田が優勝を果たしました。こういう形でサッカーの強豪校の選手がフットサルに取り組んでくれるということも非常にうれしく思いますし、フットサルのクラブチーム、高校のフットサル部の人たちが目標になる大会ができたということは、非常にこの世代のフットサルにとっては大きかったと思います。ただ今年は新型コロナウイルス感染拡大のために開催されず、ということになっております。

私自身が神戸のNPO で夏フェスティバルを開催しています。いくつかの大会ができると、もうひとつ夏の大会がほしいという欲が出てきて、皆さんから



### グリーンアリーナ神戸カップ U-18フットサルフェスティバル

夏休み期間のフェスティバルとして開催。本年度は関西のチームのみで実施した。

2012年 SAKUYO Coracao de Verde  
※「クラークカップ U-18フットサルフェスティバル」として開催  
2013年 名古屋オーシャンズU-18  
2014年 岡山県作陽高校  
2015年 作陽高校  
2016年 フウガドールすみだファルコンズ  
2017年 OKAYAMA SAKUYOSBF  
2018年 ロンドリーナU-18  
2019年 (男子) 北海道U-18 (女子) HU18 (北海道女子)  
2020年 DAY1 立命館宇治高校 DAY2 神戸国際大学附属高校

の要望を受けて作った大会です。こちらも北海道から、南は鹿児島実業からみなさんたくさん参加していただきましたけれども、今年は遠方からの参加できないということで、関西のチームのみでワンデーの大会を二日間という形で開催しました。8月もまだ非常にコロナの影響が厳しかった時なので、たくさんの皆さんから厳しいお言葉をいただくであろうと思いながら開催しましたが、もちろん参加している方からはありがとうという言葉いただきましたし、開催に対してのネガティブな声がほとんどなかったというのは意外でもありました。やっていいのか議論、自問を繰り返しての開催でしたが、やってよかったなという感想を持った大会になりました。



2017年 1月6日⑤、7日⑥ エコパアリーナ (静岡県)  
優勝：HeroFC U18F (静岡県)

2018年 1月6日⑤、7日⑥ 武田テパオーシャンアリーナ (愛知県)  
優勝：SANTOS FC18 (愛知県)

2019年 1月5日④、6日⑤ ことぶきアリーナ千曲 (長野県)  
優勝：京都橘高等学校 (京都府)

2020年 1月4日④、5日⑤ ことぶきアリーナ千曲 (長野県)  
優勝：シュライカー大阪 U-18 (大阪府)

さて、まさに今準備をしている大会です。2017年に静岡でエコパアリーナ、素晴らしい会場で開催しました。地元のHeroFCが優勝です。翌年は会場を名古屋のオーシャンアリーナに移して、これまた地元のサントスFCというブラジル人も参加しているブラジル系のフットサルを見せてくれるチームが優勝をしました。2019年、2020年はことぶきアリーナ千曲、長

野県で開催しました。昨年は京都橘、サッカー強豪校からフットサルに参加してくれたチームです。今年1月はシュライカー大阪、日本代表にも選ばれている選手も名を連ねるFリーグの下部組織による初めての優勝ということになりました。

**実施概要**

1. 期日 2021年1月9（土）、10（日）
2. 会場 ことぶきアリーナ千曲（長野）
3. 主催 特定非営利活動法人サロン2002
4. 主管 長野県フットサル連盟
5. 後援 長野県、長野県教育委員会、千曲市、一般社団法人信州千曲観光局、一般社団法人長野県サッカー協会、戸倉上山田温泉旅館組合連合会
6. 出場チーム16チーム  
北海道、東北、宮城、埼玉、東京（2）、神奈川（2）、富山、長野、静岡（2）、京都、大阪、兵庫、和歌山（以上13リーグ、16チーム） 愛知、熊本は出場なし
7. 大会形式 16チームによるノックアウト方式。  
1回戦・準々決勝敗者による交流戦を行う。
8. 代表者会議 2021年1月4日19：00 オンラインにて実施

続いて本年度の計画です。年明け1月9日、10日、ことぶきアリーナ千曲で、準備を進めさせて頂いております。昨日、地元の観光局さんと長野県フットサル連盟の皆さんと会議を行い、非常に厳しい状況ではあるけども、開催に向けて準備しています。後援に長野県、県教育委員会、千曲市、一般社団法人信州千曲観光局に入っていていただいて、地元密着の大会になってきたことを非常にうれしく思っております。今日はまさに観光局の事務所から私と中塚さんは参加しているんですけども、その観光局の専務理事でいらっしやいます小沼浩栄さんに一言コメントを頂きたいと思えます。よろしくお願ひします。

**小沼**：恐れ入ります。ご紹介頂きました、信州千曲観光局の小沼と申します。フットサルの受け入れの話の前に、少しばかり千曲市のご紹介をさせて頂ければと思います。位置関係で言いますと、長野市と上田市という有名な都市のちょうど真ん中ぐらひになりまして、人口が58,000名ほどの地方都市です。産業の中心は観光が主体になっておりまして、その中でも戸倉上山田温泉。今回皆さんに来ていただく時に、宿泊を準備させて頂きたく温泉地となります。また観光地と致しましては、日本遺産という制度がございまして、今年そちらに「月の都」ということで、姨捨の棚田ですね、そこから見える月の景色というのが非常に歴史的にも有名ということで、日本遺産に登録になりました。今年からかなりそういった部分では色々なところで取り上げていただけるようになってきたのか

な、という状況です。

千曲市という名前自体、全国の皆さんに知られるのが難しかったのですが、皮肉なことに昨年の台風19号で被害にあつて、全国の皆様に千曲市という名前が知られてしまいました。ちょっと残念な結果なんですが、そこで知名度を上げてしまったという状況です。

今回フットサルの受け入れに對しましては、一旦私ども戸倉上山田温泉の宿泊施設を押さえております。こちらの方は、今回、通常価格よりGoToキャンペーン、いま対象にはなりますので、こちらを対象にさせて頂き、受け入れをさせて頂きただけであればと考えています。しかしいま政府の方で、かなりGoToの見直しもありますので、状況によってはどういう形になるか、何とも言えないところなんです。いまの段階でお話できるのはGoToの対象にできますので、なるべくお早めのお申し込みをいただければというふうに思っております。申し込みについては私ども信州千曲観光局の方で承りますので、こちらの方におっしゃっていただければ、全ての手配はいたします。

また各旅館についても、感染症対策しっかり行なっております。ですので一緒の部屋になつても、そこら辺の対策も含めてガイドラインに沿って行なっております。旅館さんでコロナが発生したとか、そういったケースも今のところございませんので、安心してお越しいただけるのではないかなと。逆にお越しいただけるお客様には、感染症対策のこちらのガイドラインに沿って対応していただければと思います。いずれにしましても試合当日またその前後、いろいろな部分で注意しなければいけない点がございますので、他の部分についてはまた私どもの関係者と合わせていろいろな対策をとりながら、ぜひまずは大会を盛り上げていただければと思っております。

基本的に千曲市はこういった大会とかで来て頂ける皆様ウェルカムでございますし、特にこういった高校生の大会とか、そういったものがいろいろ消えていく中で、一つでもそういった部分で協力できればと考えておりますので、何卒よろしくお願ひ致します。以上でございます。

**本多**：小沼さんありがとうございます。本日、北海道フットサル連盟の荒川さんにご参加いただいております。各地のリーグがどういった状況になっているのか。まだリーグが行われていない地域もたくさんあると伺っておりますので、今の北海道の状況を聞かせて頂けるとありがたいです。

**荒川**：ご紹介いただきました、北海道フットサル連盟専務理事をやっております荒川と申します。本多さんとも今日が本当に初体面ですが、先ほど紹介されましたホンダカップで北海道の予選をるところから繋がりがありまして、U-18 リーグチャンピオンズカップにも北海道から参加させていただいております。今年は4～6チームを募集し、リーグ戦を3～4日かけて11月に行く予定でしたが、コロナ感染拡大に伴い自粛するチームもあって参加が2チームとなったため、ホームアンドアウェイ方式で行うことになりました。それが10月末ぐらいから北海道もかなり陽性者が増えてきて、北海道独自で決めている感染警戒ステージが3に上がってしまったところもあり、北海道サッカー協会も11月の中旬に年内の主催大会の中止を、英断ではあると思うんですが早々に決定しました。当連盟としても、協会の決定に従い、11月の当連盟の主催事業の中止を決断しました。そのため、U-18のリーグは行っていない状況です。なお11月の常務理事会の中でも、リーグができなかった状態で代表チームを長野県に出すべきなのかどうかということも協議をし、年内事業を中止にするのに1月上旬の、それも年始の大会に出場させていいものなのか、などの議論をし、見送るべきだという結論には達しています。ただリーグに参加した2チームからも「何とか出場できないか」という話もあり、本日、皆さんのお話ですとか本多さんのお話ですとか、そのあたりも伺いたくてシンポジウムに参加した次第です。

北海道もやはりフットサルよりサッカーに偏重しています。冬の期間はサッカーができないので、その代わりにフットサルをするチームが多い中、最近クラブチームで、真剣にフットサルに取り組んでくれるチームが増えてきているという印象は受けています。JFAの大会や、神戸のグリーンアーリーナの大会もそうですし、今回のチャンピオンズカップにしても、U-18年代のチームや選手にとって非常に貴重な機会になる良いイベントだと思いますので、今後も協力させていただきたいと思っております。

**本多**：ありがとうございます。大会は16チーム参加で現在準備をしております。(2)と入っているところ、東京、神奈川、静岡につきましてはリーグ参加チーム数が多いということで、2チーム参加ということで予定しています。今年新しく参加予定が宮城県、和歌山県です。昨年まで積極的に参加して頂いていま

した愛知県につきましては、今年はU-18リーグが開催されていないということで出場なし。熊本はリーグが終了していて1位のチーム、熊本第一高校が優勝して非常に喜んで出場します、ということでしたが、学校から出場は難しいという通達があって、出場できなくなりました。次に2位のチーム、以前にも参加のあったエンフレンテ熊本は、保護者の皆さんと協議した結果、出場は難しいということで、熊本県からも出場は無しとなりました。大会形式については例年通り16チームのノックアウトで、1回戦・準々決勝敗者の交流戦です。参加が16チーム以下になった場合は大会形式の変更ということも、検討していくことになるという状況ですということになります。代表者会議は、通常は大会の前日や当日に行われるものですが、今回はオンラインで実施ということで、1月4日の19時に予定しています。

大会を開催するにあたっての考え方をお話しします。まず、できない状況の中で何が出来るのか。緊急事態宣言もないしできる状況だね、という安易な考え方ではなく、非常に厳しい状況の中であるということをしかり認識して、その中で何が出来るのか工夫をしているという状況です。次に、多くの人の納得、賛同を得られるか。たくさん関係者の方々、保護者や学校の先生も含めて、皆さんが納得して頂ける、賛同していただける、100パーセントの賛同は難しいかもしれませんがもしもしっかりとそういう視点を持って進めていく必要があると考えております。3つめは、無理はしない、しかし、できることやるべきことはしっかりとやりとげる。このような状況ですのでできないことも多いですが、でもできることやるべきことたくさんあると思います。たとえばリアルに集まるシンポジウムできないけれども、オンラインでできるんじゃないかとか、何が出来るのか何をやるべきなのか、しっかりと考えて、実行していきたいと思っております。

## スポーツ大会の存在意義

勝利や記録を目指し、自らを高め、競技を行うこと。  
その姿を観戦し、応援すること

地域や国などが異なるチーム、人との対戦、交流

ひとつの場に選手、関係者、観客が集うこと

コロナのためにできないこと、困難なことばかりだが、知恵を借り、協力を得て、  
できることをしっかりと実行していく。

次に、無理はしないとしても、なぜそこまで大会をするのか、そもそも大会の存在意義は何なのか、ということを考えてみたいと思います。勝利や記録を目指して自らを高め競技を行うこと、その姿を観戦し応援すること。スポーツの本来の姿、本質的なところかと思えます。地域や国などが異なるチーム人との対戦、交流、一つの場所に選手、関係者、観客が集うこと、人と集うことで喜びや感動が生まれる、ということ。現状コロナによってそれができない状況、行ってはいけない状況になってきています。できないこと困難なことばかりですが、知恵を絞り、協力を得て地元の皆さん、チーム、保護者を含めたすべての関係者の皆さんの協力を得て、しっかりできることを、大会当日に向けてしっかり実行していきたいと考えています。今日この後また皆さんからご意見頂きながら、開催するのか、どんなチームが出場できるか、どういうレギュレーションになるか協議していくこととなりますが、しっかりと進めていきたいと思っておりますので協力をいただければと思います。以上で発表終了とさせていただきます。ありがとうございました。

**中塚**：どうもありがとうございました。まさに千曲市でその打ち合わせを昨日からやっていたところです。北海道の状況ですとか、各地域の状況も少しずつ耳に入れながら、コロナ禍において、主催者としてどのような判断をしていくべきかをいま迫られているところです。いまの本多さんのプレゼンの中で聞いておきたいことがもしありましたらどうでしょうか。よろしいですかね。

---

### <ディスカッション>

---

**中塚**：残り 30 分です。最初は天皇杯という大きなところから入り、お祭りの話があり、そして地元千曲での U-18 フットサル、NPO サロンが主催する大会の話にたどりつきました。少し時間を区切って、まずこの U-18 のフットサル大会を巡って、気づいたことや感じたこと、考えたことを出し合いたいと思います。

まずこの大会は、リーグをやっているところが集まってくるという考え方です。先ほどの荒川さんのお話の中で一つだけ気になったのは、U-18 の「予選リーグ」という言い方をされたことです。確かに千曲市で行われる大会が本大会だとするならば各地域のリーグは予選ということになるかもしれませんが、むしろリーグ戦が、つまり地域に根ざした日常生活がベースであり、そちらが先にあるというのが我々の考え方なんです。その考え方という、リーグ戦という“試合”はできないけれど、リーグという“組織”があるとすると、そのリーグからチームを編成し、選抜して高校生をよこしてもらってもいいんじゃないかと。それぐらいの発想を我々は持っていますということも踏まえて、ご参加の皆さんからご意見ですとか、この大会に対する要望ですとか、皆さんが持っておられる情報などを出していただくとありがたいんですがいかがでしょうか。

ちょうど先週、日本部活動学会の研究集会があり、「大会の意味・意義を考える」というテーマで議論したんですけれどもその登壇者の一人である嶋崎さんがおられますがいかがでしょうか。

**嶋崎**：ありがとうございます。サロン 2002 の嶋崎です。やはり日常生活の中に、どのようにしてリーグ、あるいは試合が位置づけられるかということがとても大事だと思います。その先にいわゆるイベント的なもの、非日常のスポーツ活動としての、いわゆるカップ戦があるということだと思います。やはり大事なのは、しっかりと日常生活の中に試合が位置付く、そしてそれが練習の励みになるということだと思います。そのような位置付けというのをもっともっと考えていく必要があります。どうも、先ほど中塚さんがおっしゃったように、大きな大会があって、インターハイとか選手権があって、その予選なんだという考え方がいまはベースになっていると思いますが、その逆の発想にしていかなければならないと考えています。大会の位置づけということは以上です。

**中塚**：ありがとうございます。他の方がいいでしょうか。画面上で手を上げてもらっても構いませんが。北海道の荒川さんからどうでしょうか。北海道の中では理事会で派遣見送りとの判断がなされたとお聞きしました。ただ当事者たる2チームのうち、どちらのチームか知りませんが、高校3年生にとっては本当に高校生ラストのイベントになるわけで、その辺りの現場の声をどのように拾いながら判断していくのかは、派遣する側としてもなかなか厳しいところだとは思いますが。いまのお考えを、もしよろしければお聞かせいただけないでしょうか。

**荒川**：中塚さんが言われている通り、送り出す連盟としては非常に悩むばかりで、なかなか結論が出せないというところなんです。千曲観光局の方の感染対策の話も、大会主催のみなさんの感染対策のことも十分伝わってはきます。ただチームがそれだけの意識を持っているか。どんなチームでも「行きたい」と言うんですね。ただそのチームがどれだけ感染症対策に対して意識を高めていってくれるかというのが、あまり伝わってこない。北海道は日常的にU-18のリーグがまだ確立していない状況です。当連盟でワンデー開催のリーグ戦をしていましたが、ただそれだけで終わってはモチベーションが上がらないとか、もうちょっと高い目標を持ってもらいたいな、ということもありチャンピオンズカップに出られる権利につなげる意味で始まったものでした。U-18に関しては日常的なリーグがまだ実施できていないのが今の北海道の現状です。先ほど本多さんの方からご説明あったように、参加リーグの中でも感染者数の多い地域、愛知県だったり熊本も、最初の宇都宮さんが言われていたサッカーの地域リーグに関しても、九州は開催できなかつたりします。時期によって人々の心、感情に、コロナ感染者数と同じように、かなり波があって、この時期には参加できるとかイベントとしてもいいとか。でも半月、1ヶ月違えばまた全然違う考えが出てきたり。非常に日本は広いので、当然、保護者の考えもいろんなところで地域性だったり考え方が違っていて、参加できる権利を持っていたとしても、保護者の方で反対されるとなるとチームとして参加できないですとか、結論にはなかなか達せません。非常に悩むことばかりです。本当に活路を見出せないと言うか、先ほどのプレゼンの中でもあったように「できない中で何をしてあげられるのか、何ができるのか」という事を考え、日々本当に悩んでいます。

**中塚**：ありがとうございます。いや本当に答えがないのが難しいところで、先が見えない難しさもありますよね。いまの話の中で、私も高校の教員、サッカー部の顧問として、一方ではサッカーの大会運営もするのですが、学校によって、生徒によってかもしれませんが、確かにコロナ対策の意識の差というのはあるなと感じます。うちは会場校になるのでいろんなチームが来るのですが、その中で感じます。大会そのものも、新しい大会スタイルを求めする必要があります。例えば、高校生って円陣組んで「ワー」って声を出したがるんですよね。また指導者の方も、気合入ってない高校生には「おら声出せ！」というようにやるのですが、「WITH コロナ」ではそれはNGです。「ガイドラインに書いてあるから」なしなのではなく、「飛沫が飛ぶから」なしなのです。ただそれをグラウンドでやろうとするところがある。会場にいる主催者側としては、その場で指導者に指導するわけです。だから荒川さんがおっしゃったように、参加する上での意識と習慣の改革、これをまず促していかなくてはというのをすごく感じます。これが「WITH コロナ」だし、「AFTER コロナ」のイベントの、参加者の心構えとして当然持っておかないといけないことではないかと感じます。

いかがでしょうか他の方から。コメント欄には野村さんから埼玉ソーシャルフットボールの大会の様子も頂いています。それから竹内さんからもスペシャルオリンピックにご参加いただいた、そういうような立場でしょうか、コメントのきっかけを頂いております。じゃあ野村さん。

**野村**：精神障害のフットサルの活動している野村忠明と申します。埼玉ソーシャルフットボール協会という団体の運営委員として活動していますが、11月28日に春日部にあるウイングハット春日部というところでソーシャルフットボールの大会を行いました。コロナ対策で除菌とかをしながら大会を行った感じです。1チーム病院のデイケアで入院患者さんで、難病の患者さんとかが入院されている病院のデイケアのチームが、色々感染対策とかがあるので不参加というような形になりました。なかなか厳しい状況だったと感じます。大変だなと、お話を伺いして思いました。ありがとうございました。

**中塚**：どうもありがとうございます。本多さんから、このトピックの最後にコメントをお願いします。

**本多**：先ほども参加が難しい地域があるという話を

お伝えしましたが、チームの判断、学校の判断に加えて、岡山県や福井県では高校生が県外に出ることがそもそも禁止になっているというなお話もありました。感染がまだ少ない地域にとっては感染が広がっている地域の方と接点を持つということが大きなストレスになるのだと感じています。そういった状況を受け入れて、判断し対応していかなければならないですね。

**中塚**：ということで準備をもちろん万端整えて臨むのですが、様々な状況に対応しながら勇気を持った決断を、それぞれの現場で、我々も含めてやっていかないといけないなと。しかもそれをやることによって皆さんがハッピーになれるような、そのということが求められるかなと考えています。

ではここから後半戦ですね。土谷さんが提起してくださったイベント、あるいは宇都宮さんが紹介してくださった地域クラブという部分も含めて、張さんや本郷さんからすでに様々なコメントを頂いております。土谷さんにマイクをお渡ししたいのですが、時間がなくなって話が途中で終わってしまったコロナ禍でのイベント、それと日常の部分。佐川での日常の取り組みを一部ご紹介いただきましたが、その続きの部分もちょっとお聞かせいただけないでしょうか。

**土谷**：はい、KOSUGEI-16の土谷です。じゃあ先ほど用意したスライドの、途中までお見せしていた部分以下のことをお話しさせていただきます。イベント未満の事になっていきながらそれをどうやってコロナ禍において、どのようにイベントに組み立てていくかということの参考にもなるのかなと、いまリーグの話を聞いていて思いました。我が家では、うちの子供、長男と長女が駄菓子屋を経営しています。高知県佐川町に引っ越しして借りた家の一部がタバコの対面式の販売所をもってまして、でうちの子供達が読み間違えてたばこ（ゼット）と呼んでます。

**中塚**：写真が共有されていないんですけど。

**土谷**：ごめんごめん、失礼しました。はいじゃあもう一度再生します。この駄菓子屋たばこZというのをうちの家族の子供達が経営しています。私は仕入れには連れて行ってあげるんですけど、経理から何からは全くノータッチで子供たちが自主的に始めたことで、私が2ヶ月家を留守にして家に帰ったら家が駄菓子屋になっていたという経緯があります。本当に田



舎なので子供たちが自分の意思でお金を使う場所がなかったの、そういったことも踏まえて子供たちが友達との交流の場として、駄菓子屋を始めたような考えもあるようです。このコロナ禍においては駄菓子屋たばこZも対面式なので閉店していました。7月ぐらいからまた再度オープンしたんですけれども、ちょうどその同じ時期に神奈川県横浜市の地下鉄のイベントのオファーが駄菓子屋たばこZに入りまして、キヨスクのような形で出店してほしいというオファーだったんです。当然対面式だと非常に難しいので、こういった形でできるかということをお子たちなりに考えて、キュレーター、キュレーターというのはその展覧会についてくるディレクターとか学芸員さんのことをキュレーターと言いますが、そういった方々とお話をしながら決めていきました。自分たちで構想して今彼らが取り組んでいる電子工作とか前の木工の技術とか、そういったコロナ禍の中で身に付けた自分たちの技術を使って、オンラインでできる駄菓子屋たばこZを、横浜に2週間程度ですけれども、イベントに出店しようということになって、これは準備している写真です。

駄菓子屋たばこZの駄菓子を買ってくれる人たちがあんまり密にならないように、机なんかも自分たちで考えて製作して、塗装してこれはバウムクーヘンのイメージらしいんですけど、こういった駄菓子屋たばこZのコピーの屋台を作って、横浜に送ったわけです。

プラス自分たちでこういった駄菓子屋たばこZオリジナルのグッズも作りながら、施工には子供たちも立ち会って自分たちの手をなるべく使って、これは横浜市営地下鉄の日本大通り駅ですかね。県庁の駅です。あそこの地下鉄のロビーにオープンしました。はいこん

な雰囲気のお店です。竹とかそういうもの全て佐川町で採ったものを使っています。

これはその施工した直後ですけれどもセンサーが入ってまして、お客さんが近くに来るとお店の人が呼びかけているように駄菓子屋たばZから声が出て、いま人気の商品とかをお伝える電気を使ったシステムが入っています。

高知県佐川町に戻ってきて子供達はオンラインでこういった形でペットカメラを使ってですね、店に来た人と交流しながら商品を販売していました。はいちょっとここまでにしよと思います。中塚さんお戻しします。

**中塚**：はいどうもありがとうございます。私もこの話を Facebook では見たのですがどうも頭の中でピンとなくてですね。佐川町でやっていた子供達の取り組みがどのように横浜に飛び火し、展開してるのかなと興味を持っていたものですから。どうもありがとうございます。

**土谷**：さっきリーグの話に混ぜてそうだなと思ったのは、リーグが先にあってそれがあある種の地域コミュニティの場になっていて、そこから大会とかカップ戦というのがその次にということなんです。卵が先か鶏が先かの話だと思うのですが、カップ戦の頂点を目指し

てリーグ戦をするのではなくて日常としてリーグ戦があるというのは非常に共感できるお話だなと思って聞いておりました。アートにも通じるなと思いました。

**中塚**：ありがとうございます。まさに今回のシンポジウムの第一部、第二部の構成も、それぞれ別物として捉えているわけではなく、イベントから見えてくる日常、あるいは日常生活にどうやってイベント性を持たせるか。両者はたぶんつながってくるのではないかと思います。

張さんから随分前に、たぶんそのことに関連したコメントを頂いております。張さん聞こえてますか。チャットの方に 11 時 2 分にかかれているコメントが、いまの関連になるかなと思いますが。張さんの方からちょっと補足説明いただけるとありがたいんですけども。

**張**：はい、どうもこんにちは。感想を書かせて頂いただけなんですけれども。常々お祭りとスポーツはどう関係するのかなというのを考えていて、今日の土谷さんのお話を聞きながらやっぱりすごく質が同じなんだなと感じました。ただ祭りというのは年に一回しかないの、そうするとコミュニティを強くしていく時にちょっと弱いところがある。一方スポーツ、特にリーグ戦は、ほぼ毎週のように非日常のお祭りみたいなものがあって、そういうのと年 1 回の祭りがくっ





ついていくのが一番理想系かなと思うのが、今日の話  
を聞いて思った次第です。ただ、アート系の方とスポ  
ーツ系の方って、僕は交流がないような気がしますし、  
なんか競い合ってるようなところもあるような気がす  
るんで、そこはそうじゃないんだよ。俺たち実は仲間  
だよ、同じことをしようとしているんだから一緒に  
やって行こうよ、っていう雰囲気が出ていくとこれ  
から良いなと思って感想を書きました。以上です。

**中塚**：ありがとうございます。まさに土谷さんがな  
ぜここにいるのかということにつながりますよね。随  
分前のことですが、私が DUO リーグー地域に根ざし

た高校生のサッカーリーグを始めた頃、ひょんなこと  
から土谷さんと知り合いになり、「これまでのスポ  
ーツ観とこれからのスポーツ観」を示した時に、「その  
話、アートも一緒だよ」と。つまり、これまでのスポ  
ーツは補欠ばかり生み出していたけど、これまでのア  
ートも、展覧会へ向けての作品作りばかりで、展覧会が  
終わったら全部在庫になると。「在庫ゼロのアートラ  
イフ」。色んな所で一致して意気投合したのがたぶん原  
点にあるのだと思います。ですから本日土谷さんが提起  
してくれた話題は、おそらくここに参加された多く  
の方のハートに響いているのではないかと。コメント欄  
にも色々書かれていますが、すみません時間があまり



なくて拾いあげることができなくて申し訳ありません。

お一人だけ、大友さんから手が上がっていました。大友さんは移動中なのですが取れますか。神奈川県サッカー協会フットサルでアンダー 18 を担当されて…。

**本多**：大友先生は、神奈川県フットサル連盟理事長ですね。

**中塚**：大友さんから手が上がっていました。聞こえますか大友さん。

**大友**：大友です。こんにちは。本日リーグ戦の大会 13 日目で、スマートフォンで繋いでいます。今日まさにリーグ戦 13 日目です。今日を合わせてあと 5 日、合計 18 日間でリーグ戦を終える予定で現在進行形です。本日はミズノフットサルプラザ藤沢に来ております。リーグ戦の準備をしている選手たちもいますし、リーグとも連盟とも関係なく小学生が試合をしていたり、人工芝の 3 面ではやっています。真ん中のピッチでは大人がフットサルをしていて、奥のピッチは若者ですね。インドアコートではちょうど女子チームが練習試合をしているところです。この女子の試合が終わったらリーグ戦です。検温であったり、選手全員の健康チェックシートを毎回全員分回収したり、たくさん苦勞する点もあります。健康チェックも当日だけでなく、前 2 週間後 2 週間全て把握するというようなやり方で健康管理しながらやっております。感染者が U-18 では出ていませんが、連盟全体としては感染者も何人か出ております。ただその都度、もしも何か起きてしまった場合にも、必ず報告書の中に、時系列でどのように感染していたか、保健所と同じような形で経路を辿り、どういった対策がなされていたか確認します。

夏の全日本ユースが中止になった際も残念に思いました。選手達は本当に一生に一度、学生時代のたった 2 年半のこの期間の中で大切な機会を失われることがないように、全力で進めていきたいと考えております。

夏は甲子園やインターハイも中止になってしまいました。それを受けてもフットサルの方も、これはちょっと厳しいかなと感じました。このリーグチャンピオンズカップもそうですね。高校サッカー選手権が中止にならない限りは是非全力で進めてもらえればと思っております。

学校に関しても練習試合とか遠征に関する制限は大変多いです。ただし大会となれば話は別です。大会で

あれば、他の部の兼ね合いも含め、NG は出せずにいるっていうのがいまの神奈川の他の学校の状況かと考えております。

**中塚**：はい、ありがとうございました。現場からのレポートでした。東京でもちょうど本日、この大会に出場するチームを決める代表決定戦をやっています。そういったのが日常になって、その日常を束ねていくような非日常のイベントがバランスよく配置されるような、“ゆたかなくらし” コロナ禍であっても見えてきたこと、それを「AFTER コロナ」にうまい形でつなげていくことができればなと思っております。

最後に本多さん、土谷さんの順で一言ずつ、全体を通してコメントを頂き、第一部を締めたいと思います。じゃあ本多さんお願いします。

**本多**：はい本日はどうもありがとうございました。開催まで一か月弱になり、ここからは引き続き本当に厳しい判断が続いていくことと思います。今日皆さんから貴重なご意見をいただきましたし、今後も本当にメールでも電話でも slack でもなんでもけっこうですので、厳しいご意見も含めて是非お寄せ頂いて、厳しい状況の中で何ができるかをしっかり考えていきたいと思っております。引き続きよろしく申し上げます。ありがとうございました。

**土谷**：サロン 2002 からは、毎回毎回、アートにも活かせるアイデアをもらっています。今回も多くの方からいろんな意見、それから報告も受けて非常に参考になりました。また第二部、引き続きフルで参加できるかわかりませんが楽しみにしています。よろしく申し上げます。ありがとうございました。

**中塚**：この後すぐ、建物隣のアルピコタクシーへ行き、12 時 37 分発の電車で東京へ戻ります。第二部は東京都文京区のとあるお店から発信したいと思えます。来られる方はご連絡ください。新たな情報発信と飲み会様式にも後ほど試みたいと考えております。第二部は 16 時半からです。15 分前から入れます。URL は同じです。まだ申し込んでないけど面白そうだなと感じた方は是非お入りください。友達にもお声かけいただいで結構です。どうぞよろしく申し上げます。

ではこれにて終了です。どうもありがとうございました。



■上海日本人サッカーチームからメッセージ写真撮影

コロナ下の世界の動きと私の動き ～20年4月から7月～



■Jリーグが開幕

春日大樹氏の発表資料より (P.42 参照)

## 第2部 「新しい日常」を中心に

- 16:40～17:05 田中理恵 (会社員／「リモート旅行部」共同主宰) …働き方の変化とリモート旅行の試み
- 17:05～17:30 春日大樹 (某日系総合電機メーカー上海支社所属) …海外勤務で感じたこと
- 17:30～17:55 岸 卓巨 (A-GOALプロジェクト代表／NPO サロン事務局長) …休み時間はアフリカに
- 17:55～18:30 クロストーク
- コーディネーター 中塚義実 (NPO サロン理事長／筑波大学附属高等学校)

【参加者 (会員・メンバー) 20名】

浅見明子、安藤裕一、春日大樹、川戸湧也、金子正彦、岸卓巨、熊谷建志、小池靖、笹原勉、嶋崎雅規、白井久明、関秀忠、田中理恵、茅野 英一、土谷享、徳田仁、中塚義実、野村忠明、本郷由希、吉原尊男

【参加者 (未会員) 11名】

荒川浩幸 (北海道フットサル連盟)、Yasuko Kusakari、Hiroshi Komatsu、仲誠一、浜野大志 (同志社大学)、momo、ysk kimura、216-776-607、Jindo Morishita、OSHIMA Ryo、Kadiri Galgalo

## <オープニング>

**中塚**：改めまして皆さんこんにちは。進行役を務めます、NPO 法人サロン 2002 理事長の中塚です。午前から参加してくださった方、私の背景が変わっているのはおわかりだと思います。午前の第1部は長野県千曲市から配信しておりました。電車に乗ってとっととととと来ると3時半すぎに東京都文京区に着くんですね。いま茗荷谷駅前のとある居酒屋から配信しております。

初めて参加される方がいらっしゃるかもしれません。オープニングで主催者たるサロン 2002 とは、そして本日のシンポジウムの位置付け、演者紹介、進行案、この辺りをご紹介したいと思います。

2014年にNPO法人となりましたが、前身の研究会を含めるともう20～30年、長い間やっています。「サロン 2002」の名称では1997年から前月月例会をやっており、今日のシンポジウムが通算290回目の月例会となります。「スポーツを通してのゆたかなくらしづくり」を“志”に掲げるNPOです。いまだにはスポーツだけでなく、とにかく“ゆたかなくらし”に力点を置き、いろんなことに取り組んでいます。

その観点で言うと、今年の春先から世界中がとんでもないことになりました。皆さんそれぞれの立場で悪戦苦闘されているし、この先も正直見えないところです。「WITH コロナ」だからこそ見えてきたこともあります。そして見えてきたことを「AFTER コロナ」にいかにつなげていくかということをテーマに、サロンの会員・メンバーが登壇者となって様々な角度から知見を共有しようというのが今日のシンポジウムです。午前中の第1部では「イベント」を中心にとということで、天皇杯の取材をしている宇都宮徹壺さん、そして青森の八戸でお祭り絡みの教育プログラムに関わっている土谷享さん、そして千曲市で我々サロンが主催するU-18フットサルリーグチャンピオンズカップの運営に携わる本多克己さんの3名に登壇していただき、イベントから見えてくるものについて意見交換しました。後半戦、第2部では「新しい日常」を中心にとということで、3名の演者にご登壇いただきます。それぞれ20分ぐらいずつ話してもらい、それぞれの発表の後に約10分の質疑の時間を取り、最後に全体でディスカッションしようと考えています。

私の方からお名前だけ申し上げますので、各演者から一言ずつ自己紹介していただければと思います。最初は田中理恵（たなかりえ）さんです。そして次に春

日太樹（かすがたいき）さん。3番目は岸卓臣（きしたくみ）さん。この順番で、簡単に自己紹介をお願いします。

**田中**：田中理恵です。よろしくお願いします。私は会社員で、会社員として働きながら色々旅行に行っていました。今回リモート旅行部というのを立ち上げたので、そちらを紹介したいと思います。よろしくお願いします。

**春日**：皆さんこんにちは。春日大樹と申します。現在上海におります。コロナ禍での海外生活というところで、現地の様子をお伝えできればと思います。よろしくお願いします。

**岸**：岸です。よろしくお願いします。思いっきり日常の空間にいますので、息子と一緒にいますが、アフリカとのつながりで始めたプロジェクトについて、まさにコロナの中で始めたプロジェクトですので、そこと私自身の日常とを兼ねてお話しできたらと思っています。よろしくお願いします。

**中塚**：ということで私の方から最初にいくつか確認させてください。まずオンラインならではということになるかもしれませんが、確認事項がいくつかあります。記録用として主催者が録画しております。しかしこの映像を公開することはありませんのでご安心下さい。一方、皆さんの方での記録行為、これは固くお断り致します。よろしくお願いします。最終的に本日の内容を書き物にまとめます。NPOサロンのホームページで公開し、毎年発行する広報誌にも掲載します。ホームページ上に名前を出したくない方は、チャット機能を使ってお知らせください。公開できる範囲でご記入ください。皆さんの画面の左下に表示されているお名前は、できれば氏名・所属という形で直していただければと思います。右上の「…」のところカーソルを持っていくと修正できると思います。音声はミュートにしてください。画像できるだけオンにして反応を大きめにしてもらえると、話す人がやりやすいと思います。各演者の発表の後で質疑の時間を取りたいと考えますが、皆さんに発言していただくことはなかなか難しいので、できればチャットの方にお書きいただければと思います。時間ができれば皆さんにもご発言いただくような時間が取れればと思います。時間は限られますが、密度濃く進めてまいりますのでどうぞよろしくお願いします。

それでは最初の演者の田中理恵さん、「働き方の変化とリモート旅行の試み」ということで、よろしくお願いします。

# 働き方の変化とリモート旅行の試み

田中 理恵

**田中**：皆さんこんにちは。田中です。よろしくお願いします。今日私からは「働き方の変化とリモート旅行の試み」を、ご紹介させていただきます。最初に自己紹介ですが、生まれは大阪府で3年だけ関西に住み、その後はずっと首都圏で暮らしています。大学在学中にスキューバダイビングを始めて、毎月のように各地に潜りに出かけていました。週に5回大学のプールで泳いで、週末になると海に出る生活で、伊豆半島や伊豆七島、沖縄、小笠原等、毎月のように色々な所に潜りに行っていました。その頃、思い立ったが吉日であちこち遠出していたことが、今につながっているように思います。

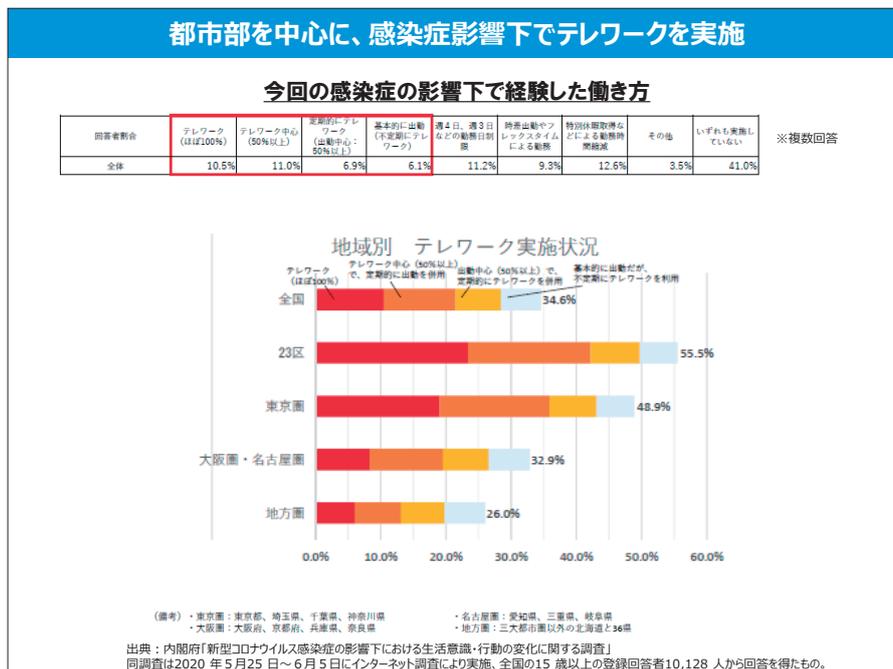
大学卒業後に民間企業に就職しまして、勤務地はずっと東京です。民間企業のマーケティング調査や官公庁の様々な調査業務を行う調査会社に勤めています。

会社員をしながら、島根県隠岐島の海士町のダイビングサービスのお手伝いを7年間やっていました。休暇になると現地に長めに滞在してダイビングのガイドをし、終わると東京に戻る生活をしていました。この時はあまり自分では旅行に行かず、むしろ旅行客をお

迎えする側として働いていました。ただ近年は結構本業が忙しくなり、オンタイムは会社に長時間いて、ゴールデンウィークのような長い休暇に海外に旅行に行く生活をしていました。

このパターンを繰り返していたんですが、4月に緊急事態宣言が出たことで、生活パターンが変わりました。「オンタイムは出勤しないで、自宅で仕事をして」ということになったので、オフタイムも遠出はできず、要は「オンとオフの差があまりないよね」という状況になったということです。

会社員とか勤め人の方はテレワークを推奨されて、私と似たような経験をされている方もいらっしゃるかと思います。内閣府で5月末から6月上旬にかけてアンケート調査（内閣府「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」）が行われましたが、実際にテレワークをやっていた人は都市部に多く、結構地域差がありました。都市部にいた人は、急にテレワークになったことで生活の変化が大きかった方も多いかと思います。



あとは業種によってもテレワークの実施状況が結構違って、医療や福祉に携わる方たちは現場に行かねばならず、テレワークが行われた業種と行われなかった業種に分かれていますね。ただ、その後時間も経過して、直近ではテレワークがどの程度行われているかの公的機関からの情報は、意外と少なかったです。緊急事態宣言明けもテレワークを継続するところが多いように聞いていましたが、肌感覚としては継続されているところと、元に戻ったところに分かれているように感じました。公のデータもなかったので、私の周囲でおおよその実施状況を尋ねてみました。緊急事態宣言があった4～5月頃は、私の周囲の身近なところではどの組織もそこそこ高い割合でテレワークが行われていましたが、6月になり出社が再開した途端にほとんど元に戻ってしまったというところもあれば、再開前の6～7割ぐらいの割合でやっているところもあって、組織によって分かれています。特に今回尋ねたところだと、緊急事態宣言明けの6月の実施状況によって、その後も高い割合を保っているのか元に戻ったのかが分かっているようです。こんな感じで、現状のテレワーク実施状況はまちまちかと思いますが、皆さんの所はいかがでしょう？元に戻っちゃったよという方も、いらっしゃいますか？

岸：週2日オフィスです

田中：週2日ですか。私も週の半分ぐらいなので、同じぐらいですね。他の方はいかがですか。

野村：僕は戻りました。

田中：そうですね。週5ですか。

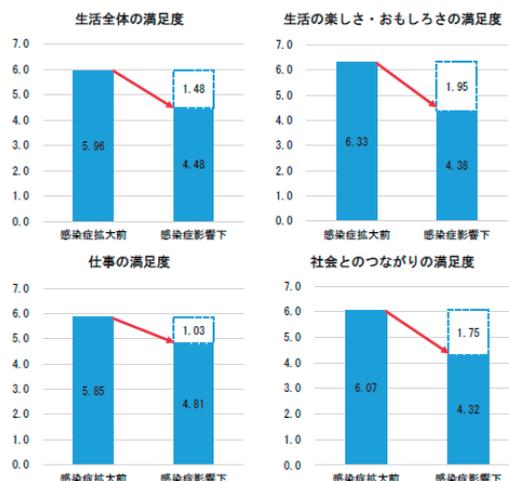
野村：週5です。

田中：なるほど、やっぱりそういう方も多いですね。ありがとうございます。内閣府ではちょうど緊急事態宣言が明けた5月末から6月上旬にかけて先ほどのアンケート調査（内閣府「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」）が行われていましたが、以前から生活の満足度等も尋ねています。今年は「感染症拡大前と感染症影響下では、満足度が違うか？」ということもいくつかの視点で確認しています。「感染症拡大前」についての質問と「感染症影響下」についての質問があり、それぞれ10段階で回答してその平均点の差を比較していますが、どの視点で見ても感染症拡大前から比べると、感染症影響下では低下しています。「仕事の満足度」は1点ぐらいしか落ちていませんが、「社会とのつながりの満足度」や「生活の楽しさ・おもしろさの満足度」は結構落ちています。この内閣府の調査を細かく見ると、テレワークで出勤しない人とテレワークが出来ずに出勤する人では、満足度の低下具合が少し違い、前者の方は大きな低下になっていないという傾向が出ていたようです。こんな形で、働き方だけではなくて色々思っていることも変わってきているようです。

また、感染症影響下で新たに行ったことや取り組んだ事もこの調査の中では尋ねていて、皆さんお時間があつたせいか何かやられた方も多かったです。その中では「今までやれなかった日常生活に関わること（家の修繕等）に新たに取り組んだ」という方が一番多い

のですが、例えば私の周囲でも「断捨離をやった」みたいな話はよく聞きました。また、今までできなかった趣味を始めたとか、自分からオンラインでの発信や交流に挑戦してみたという結果も出ています。確かに私の周囲でも、この機会にzoomを始めたとか、前もやっていただけ頻度高く使うようになったという話はよく聞くので、確かにそうかなと思いました。あとはビジネス系の勉強への取り組みをされた方も、データでは出ています。皆さん色々されていたようですが、データを年代別に見ると若い人ほど色々なことを取り組んでいて、年齢が高くなると「特に挑戦したり、取り組

### 感染症影響下では、生活や仕事への満足度が低下



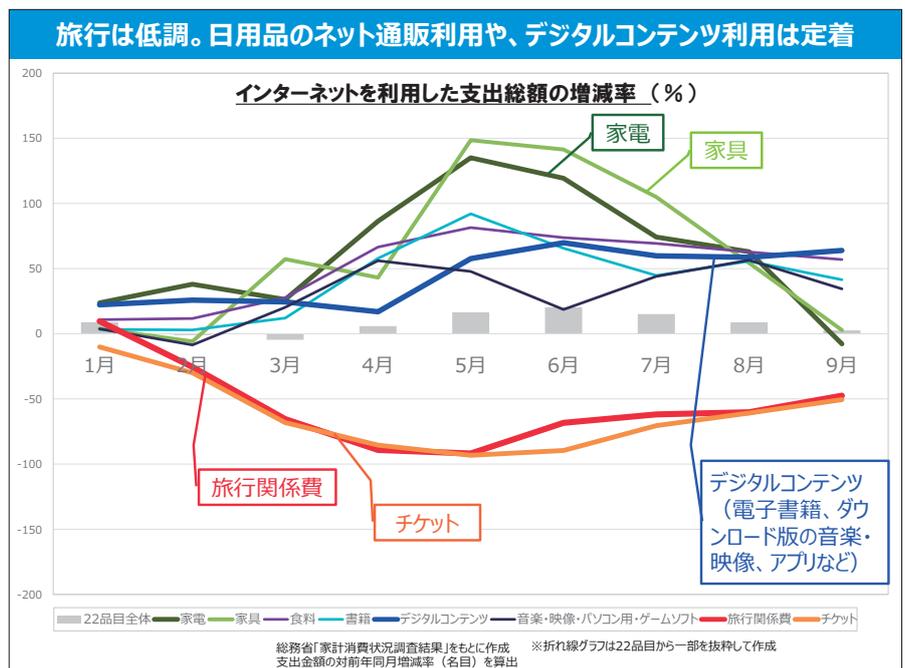
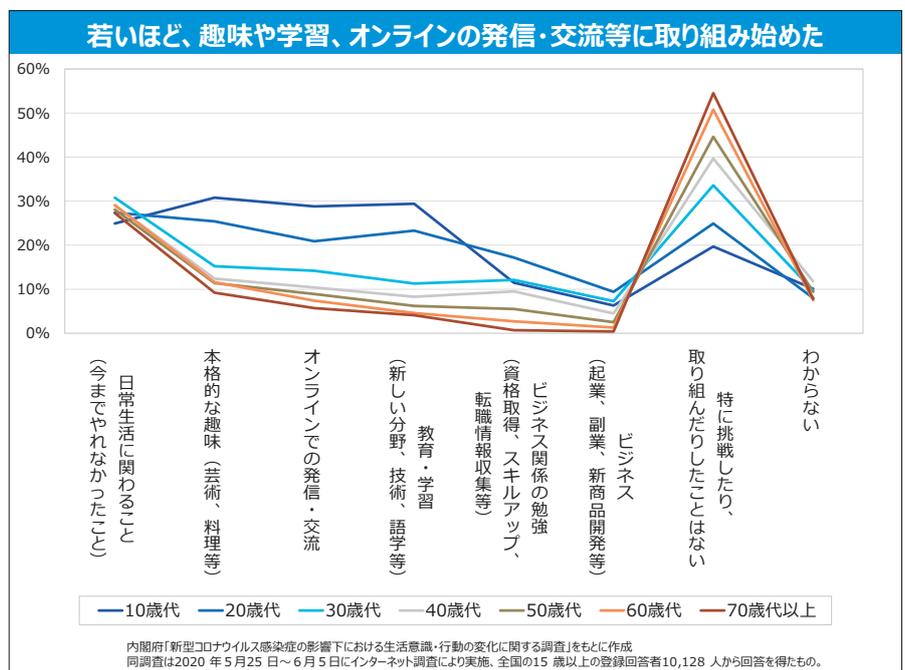
出典：内閣府「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」  
同調査は2020年5月25日～6月5日にインターネット調査により実施。全国の15歳以上の登録回答者10,128人から回答を得たもの。

んだりしたことはない」という方の割合が高くなっていました。オンラインで何かやったという方も、若い方ほど多いです。ただこれは新たに取り組み始めた割合であり、以前からオンラインで色々やっていた人たちもいるので、それも合わせるとオンラインで自分から発信とか交流をする人がかなり増えているのでは？と、感じました。私の周囲でも、緊急事態宣言中にfacebook ライブ等、何らかのライブ配信をトライし始めたという人もよく見かけましたし、特にこの時期に増えたように感じました。

そして、しばらくはステイホームで普段より買い物にも行きにくかったのが、ネット通販が一時期増えていました（総務省「家計消費状況調査結果」）。最近はいよいよ前年並みに戻ってきていますが、皆さん当時何を買ったか覚えていらっしゃいますか。当時は食料やトイレトペーパーの買いだめがあったりとか、パソコンの周辺用品を買った人が多かったりとか、色々買われていたものがあつたかと思ひます。総務省の調査（総務省「家計消費状況調査」）では、ネットを使って買ったものが22品目に分類されて前年に比べて増減が出ていますが、今日は少し品目を絞ってお話しします。例えば家電や家具は緊急事態宣言の頃に一気に買われて、その頃に対前年比は急にプラスが大きくなってますが、秋になると前年と同じに戻ったりマイナスになっています。その他、食料や書籍のように緊急事態宣言の頃に対前年比のプラスが大きくなり、そのままオンラインで買うことが定着した物もあります。図では省略していますが、衣料品とか化粧品とか、日常的に使う物もネットで買うことは定着しているようです。また、デジタルコンテンツ（電子書籍、ダウンロード版の音楽・映像、アプリなど）は緊急事態宣言のあたりから前年比のプラスが大きくなり、その後低下せずに高い割合を保ち続けています。色々な

物のデジタル利用の定着が、このあたりにも現れているように思ひます。逆にサロン 2002 の皆さんがわりと関係がありそうな、旅行に関する費用やチケットは2月以降ずっと低迷したままです。緊急事態宣言の頃はこうした変化を感じながら、なんとなく「家にいるし、何かやろうかな」と思っている人が多い状態だったように思ひます。

そんな時、世界一周中に旅行のブログが有名になった友達が5月のテレビ番組でリモート世界旅行のナビゲーターをやっている、他の友達との会話の中で「私たちも試しにやってみようか」ということになりました。友達と二人で共同主催者となって第1回は5月に行い、その後も続けてみました。今となってはり



モート旅行とかオンラインツアーとか色々な名称で、趣向を凝らした有料イベントが行われていますが、当時のテレビ番組の中でどのような形で行われたかを少しだけご紹介します。現地レポーターはいなくて、日本でネット上で Google ストリートビューを操作して、そこに出てくる現地の写真等を見ながら説明していました。それを見て、「現地に誰か行かなくても出来るし、時間があるうちにちょっとやってみようか」ということで、すぐに告知して翌週に zoom で第 1 回を開催しました。第 1 回がペルーとモロッコ、第 2 回はイタリア、第 3 回フィンランド、第 4 回スイス、第 5 回グアテマラ、第 6 回クロアチア、第 7 回奥熊野、第 8 回はフィンランドの教育編に絞ったもの、第 9 回マレーシア、第 10 回は人気だったフィンランド教育編のパート 2 です。最初は仲間内に声をかけて、20～30 人ほどの方にペルーとモロッコを 1 時間でやりました。「まずはトライしてみたけど、時間不足で消化不良になりごめんなさい」というような状態になってしまったので、第 2 回からは 1 テーマ 1 時間に変えました。次に Facebook の中に非公開グループを作り、その中で第 3 回から録画視聴もできるように・・・と、気軽に始めて少しずつ変えていきました。

ここで旅行の情報収集の話をする、Web で調べる人は以前から多くなっていましたが、さらに Web サイトの中での紹介の仕方も変わってきているのではと思います。以前はパンフレットのように文字で読む部分が多かったと思いますが、だんだん写真の割合が上がり、動画や VR で紹介するパターンも近年は増えているように思います。

私たちがリモート旅行の会を開催する時も、自分達の手持ちの現地写真だけで旅先の話をするのは難しい時もあり、テレビ番組のリモート世界旅行を参考にし、Google ストリートビューも使えば写真がたくさんなくても出来るのでは？というところから始めました。そのうち Google アースも使ったらもっと楽しいとか、知り合いの現地関係者にも話してもらおうとか、リソースを組み合わせると旅先が楽しめればよいのでは？と考えました。現地の関係者と言っても、現地在住の一般の方（旅行業でない）でして、参加してもらって補足説明していただいているうちに、旅行会社から声がかかって有料のリモート旅行のガイドとしてデビューされた方もいます。最近は旅行会社が有料のリモート旅行事業を始めて、力を入れているところもあるので。

他にも、私が中南米のナビゲーターをする時には、中南米の旅行中に知り合った旅行客の方に参加をお願いし、補足説明してもらっていました。ゴールデンウィークにペルーで会った人に、次の年のゴールデンウィークにグアテマラでばったり再会したので、その方に両方について補足説明していただきました。

第 9 回マレーシア編では私達は事務局に専念して、マレーシアに住んでいた私の友達にナビゲーターをお願いしました。その方も以前にマレーシア旅行中に知り合った方ですが、彼女が現地でご一緒していたお友達や現地在住のお友達に協力していただいて、今と昔のマレーシアの話をしていただきました。

他にも、第 2 回イタリア編でペルーじゃを取り上げた時も、ペルーじゃ関係者に協力していただきました。

サッカーに詳しい方はよくご存知の地名かと思いますが、中田英寿がペルーじゃやローマにいた頃に、添乗員をしていた私の友達もちょうどペルーじゃやローマに住んでいたのも、私も旅行に行っています。彼女は当時ペルーじゃの住民で、その頃のお友達の中には今も住んでいる方がいたり、私の別の友人で彼女の数年後にペルーじゃに住んだ方もいたり、住んだことがある人が多かったのも、その方たちにも参加していただき、補足説明していただきました。また、ペルーじゃは坂がた

### リモート旅行の開催

日時	内容
5/24 (日) 21時	ペルー & モロッコ
6/14 (日) 21時	ペルーじゃ (イタリア)
Facebook内に非公開グループ「リモート旅行部」を作成し、録画視聴可能に	
6/28 (日) 15時	フィンランド
7/12 (日) 21時	スイス
7/26 (日) 21時	グアテマラ
8/8 (土) 21時	クロアチア
8/23 (日) 21時	熊野
8/30 (日) 21時	フィンランドの教育編
9/13 (日) 21時	マレーシア
10/31 (土) 21時	フィンランドの教育編past2

くさんある街なんです、それを Google アースやストリートビューで紹介すると、写真でお見せするのはちょっと雰囲気が変わって面白い時があります。ご存知の方もいらっしゃるかと思いますが、ペルーは山の上であって町が高い位置にあるんですよね。スタジアムとかは下の方の平地にあるのですが、各々の位置関係を Google アースで立体的に俯瞰してみても、目線を上空から山の上の町の中のメイン広場に移してメインストリートを歩いて行く・・・といったことを、参加者の皆さんと一緒に見たりしていました。さっきお話ししたテレビ番組でも、メインストリートの中を Google ビューで進みながら「メインストリートを歩いて行くと、街中にはこんなものがあるのわかりますよ」という見せ方していたのですが、ペルーなら「この公園広場からメインストリートを歩いて行くと、あの角に現地で有名なチョコレートショップがあってね・・・」みたいなことを前に進む画面と一緒に共有しながら話ができるなど。必ずしも自分の手持ちの写真だけじゃなくても、こういうものも使いながら現地での体験を紹介したり、参加者の方からの質問に答えながら、リモート旅行をやっていました。

こうして何回かやっているうちに、最初は考えていなかった広がりが出てきました。例えば第3回フィンランド編は私がナビゲーターとしてフィンランドの紹介をしながら、現地在住の方やフィンランドに詳しい方にも参加していただいたところ、その中にフィンランドの教育に詳しい方もいました。となると、その話を聞きたい人も出てきたため、テーマを絞って深く話してもらおうということになりました。こうして参加者の中から発表して下さる方が出てきたことで、それまで参加していなかった方が初めて参加して下さったり、広がりが出てきたかなと思っています。最初は自分たちがナビゲーターで紹介することを前提にしていたので、何回かやったら紹介できるところがなくなるかも？とも思っていたのですが、回を重ねるうちに周りの方達が参加だけでなく発表もして下さるようになり、私達は事務局に徹してもよい回が出てきました。さきほど今コロナ禍で強制的に家にいたことを機に、場所によらずオンラインで発信する人が増えたというデータの話をしました、このリモート旅行の会を見てもそういう方が結構増えたように思います。「ネットで発信することには興味がなかった」とか「パワーポイントを使ったことがなかった」とか「普段スマホしか使わない」という方もいて、私たちの気軽なイベントの中で「ちょっとやってみようかな・・・」と発表

側に回ってくださるようにもなっていました。今までだったらそんなことはしなかった人たちが、参加するだけでなく、会に慣れたら発表するようになったというのは、結構大きな変化かなと思っています。

旅の楽しさではできれば現地で体感したいところですが、こんな形で旅の話で盛り上がるのも今となってはアリかなと思っているところです。簡単ではありませんが、私が今までやってきたリモート旅行の試みについてご紹介させていただきました。

**中塚**：どうもありがとうございます。前半部分では働き方がどのように変わってきたかをデータを駆使してご紹介いただき、そして田中理恵さんご自身の働き方をみたときにオンとオフの差がなくなってきたところ。まさに皆さん感じておられるところもあるのではないかと思います。リモート旅行には私も何度か参加し、「こんな旅の楽しみ方があるんだ」という新たな発見をさせていただきました。質問とかがありましたらチャットの方に書き込んで頂きたいのですが、ちょうど時間が来ているので、演者の方は次の春日さんに移り、最後のクロストークのところで改めて「リモート旅行の試みから見えるもの」を拾い上げていけたらと思います。理恵さんどうもありがとうございました。

**田中**：はい、ありがとうございました。

**中塚**：理恵さんの発表では、我々の肉体は日本にありますがハートは海外に、というようなところですが、2番目の演者の春日大樹さんは、肉体そのものがいま海外にあり、リモートでここに参加してくれているところ。どこにいるのかを、先ほど田中さんが紹介してくれた Google Earth で割とリアルに見られるので、実は事前の演者打ち合わせの際に、こんなことできるというのがわかったので、春日さんの居場所を理恵さんに Google アースで出してもらおうとしています。

**春日**：理恵さんありがとうございます。そこですね。

# 海外勤務で感じたこと

春日 大樹

**春日**：皆さん初めまして。サロン 2002 メンバーの春日と申します。いま理恵さんに出していただきました上海市内の現在隔離施設におります。ちょっとお見せします。浦東第 32 区医療隔離施設という所に現在おρισして、住所とかが書いてあってその下にルールが書いてあります。今週の火曜日 (12/8) に帰ってきて、そのまま隔離施設に入っております。どんな施設にいるのかをちょっとお見せしようと思います。私のいまいる部屋を紹介します。第 32 番隔離施設となっております。私がいる部屋はこんな感じでベッドがあって、デスクがあると。こちらが洗面でそちらに扉が見えていますが、この扉は基本的に開けてはいけないルールになっております。最近センサーがつかまして、扉を開けるとアラームが鳴ってしましまして、完全にこの部屋から出られない状況になっております。この部屋に私は今月 (12 月) の 23 日まで缶詰状態になっています。実際にどういう生活かというのは後ほど紹介させていただきます。

初めての方もおられますので、簡単に自己紹介をさせていただきます。私は春日大樹と申します。出身は京都府。1991 年の生まれ 29 歳です。筑波大学の大学院を卒業しました。学部時代から筑波大学に居まして、筑波大学蹴球部で活動していました。中塚さんは

私のサッカー部の大先輩。また同じく理事の笹原さんが学部の大先輩にあたります。演者の皆さま、大先輩に囲まれながらこういった場でお話をさせて頂くのは非常に恐縮しております。2017 年より現職の電機メーカーへ入社しまして、2019 年 8 月から、今おります上海の販売会社に出向しております。

またサロンの繋がりですが、父が高校教師をしております。全国高体連の業務で中塚理事長また理事の嶋崎さんと同僚でして、その繋がりからサロン 2002 を紹介されました。またそのつながりから 2014 ~ 2017 年の間、サロンの事務局を卒業まで務めさせていただきました。私を表すキーワードとしてはサッカー、ドイツ、あと中国が、いまキーワードになっております。

今日の発表の構成ですが、昨年 12 月のコロナ発覚から今日までの世界の動きと、それに翻弄された私の 1 年間をご紹介させていただこうと思っております。現地の様子、特に中国の様子や、日本の様子、また一部海外の様子、ヨーロッパの友人から情報をもらいましたので、なども紹介しながらお話をさせていただこうと思っております。あくまで紹介をするという立場であって、どちらの政策がいいとか悪いとか、そういったことを論じるつもりは全くございません。このことだけ事前にお伝えいたします。



隔離施設の部屋

## 浦东新区第 32 号医学隔离观察点

酒店名称: 上海市国际旅游度假区秀沿亚朵酒店  
酒店地址: 上海市浦东新区沪南公路 3001 号  
房间号:  
WIFI: AtourHotel  
密码: 4000606606

隔離施設の住所

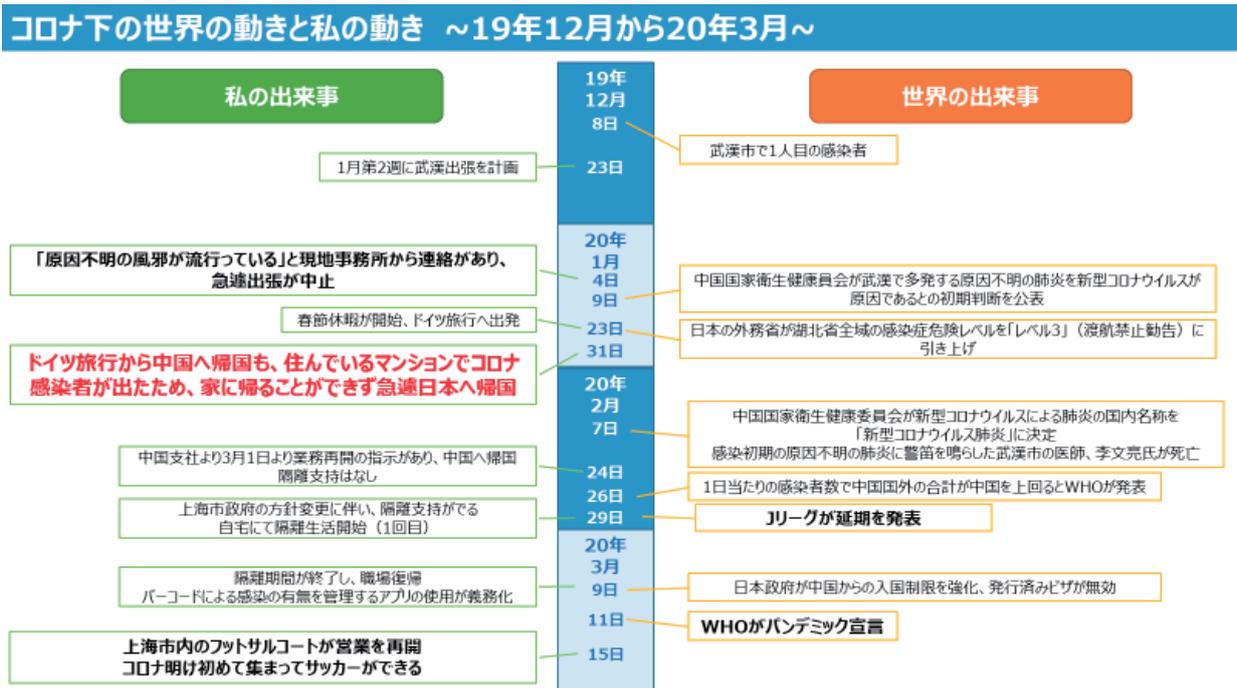
まずコロナのスタートですが、オフィシャルに中国政府が後に認めた発表によりますと、2019年12月8日に武漢市で一人目の感染者が発見されたところがスタートになっています。ただしこの頃は中国全土に情報が入っていませんでしたので、12月23日時点では、私は1月に武漢の出張を計画しておりました。全くそんな話は聞こえていなかったということです。

年を明けた1月の最初の出社の時に、「原因不明の風邪が武漢で流行っているので来ないで下さい」という連絡が私のもとに入りました。この時はまさかこんな病気が流行っているとは思っておりませんので、僕は現地スタッフに「風邪が流行っているぐらいでなぜ出張を中止するのだ、しっかり準備しているのだからそれはなしだろ」と、かなり食ってかかりました。しかし、「お客さんも外部の人を入れられないと言っているからどうしようもないですよ」というので、釈然としない思いで出張をキャンセルすることになりました。その時はまさかこんな風になると本当に思っておりませんでしたので、結果としてはここで行かなくて本当に良かったという部分もちろんあります。

その後武漢のある湖北省に関しては日本側も立ち入り禁止などの制裁はしているのですが、上海は何も変わらず、日常通りの生活をずっと送っていた中で、1月末の旧正月、お休みが10日間ほど頂けまして、非常に楽しみにしておりましたドイツ旅行に出かけたわけです。旅行中に、どうやら中国でコロナウイルスなのかすごい疫病が流行っているぞ、という情報がドイ

ツにもだんだん飛んできまして、なんかヤバそうだなと感じながら通常通り帰国しましたが、ドイツから戻って空港に到着しますと、上司から電話がありまして、私の住んでいるマンションでコロナの感染者が出たので、家に帰らないでくれと、ドイツから帰ってきた直後に言われました。「いやいやちょっと待ってくれ」という話をしたのですが、これは会社としては許可できないと言われてまして、浦東空港の到着ロビーから出発ロビーにそのまま上がりまして、「その日のうち早く大阪に飛べる便の予約をお願いします」とカウンターでお願いをして、日本に帰ることになりました。

日本に帰ってからはだんだんコロナの情報が出てきまして、中国がえらいことになっているという状況が2月、報道されていた通りですね。この間にはコロナに警笛を鳴らした眼科医の方がお亡くなりになられたというニュースも、日本でご存知の方も居られるかと思えます。そういった状況下で、私が日本に帰っている2月の中国ではコロナウイルスが猛威を振るっており、一体いつ中国に帰れるのだろう、戻っていつから仕事ができるのだろうという悶々とした時間を過ごしておりました。2月24日にしておりますが、本当はもう少し早いタイミングで、3月1日より事務所を開けるので戻ってこいと指示がありました。日本の報道を見ていると、とてもじゃないがい戻って大丈夫なのかというところが非常にありました。日本側から中国に飛ぶことが禁止になるかもしれないという動きもあったのですが、特にそういうことはなく、中国に2



## コロナ下の世界の動きと私の動き ~19年12月から20年3月~

■ 通常時の地下鉄（上）と20年3月の地下鉄（下）



■ 2月ロックダウン時の上海市内



■ 上海用QRコード



月24日の飛行機で戻ることになりました。実際この時のフライトですが、関西空港に着いてから上海の自宅に着くまで、体温を6回測りましたね。検問ごとに体温を測られまして、2時間前にとったのだから同じだろうと思いました。パスポートチェックのところで体温を測った後、帰るタクシーに乗る時にもう1回とったり、最後は家に入る時にもう1回体温を測られたり。一時間刻みで測らなくても、と思うくらいの状況の中、上海に戻りました。

この時は、まだコロナウイルスのことがよくわかっていなかったこともあり、今のような隔離のルールがなかったので、着いてから数日ほどは普通に過ごしていました。到着3日後に上海市が方針変更しまして、家に管理人の方が来て「春日さん、今から隔離してください」と急に言われ、そのまま自宅で隔離することになりました。今年は計3回の隔離を経験しましたが、これが1回目の隔離生活です。

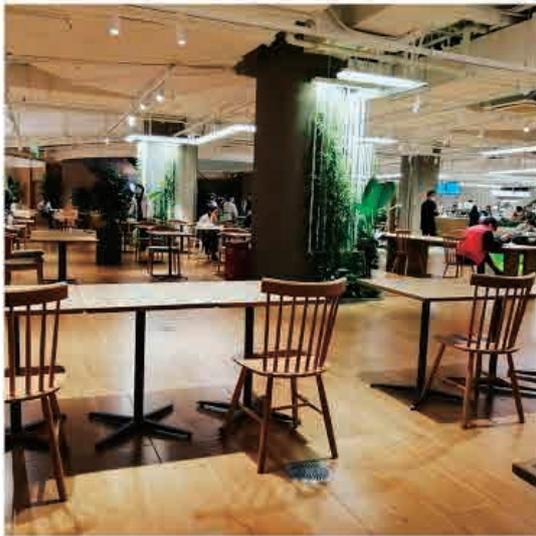
隔離があけて3月から職場に復帰し、通常通り事務所に毎日出勤し、仕事をしておりました。そんなことをしているのを横目に、日本にもコロナウイルスが入ってきてまして、2月末のJリーグが延期になり、3月に入るとWHOが全世界的なパンデミック宣言をする流れになります。なぜか中国はその4日後にフットサルコートの営業が再開して、サッカーができるようになりました。我々としては一番のストレス発散になるサッカーができるぞということで大喜びしてサッカーをしていました。世界では4日前にパンデミックが発表された直後ですが、我々としてはここから少し

ずつ回復していくぞという流れになっており、非常にギャップがあるなということです。

左上の写真は通常時の上海地下鉄です。上海は非常にたくさん走っていますので、移動は基本的に地下鉄を使います。通常時の地下鉄が上で、3月に私がコロナあけすぐに乗ったのが下です。まだまだ人は少なかったです。この2月、ロックダウン時の上海は、友人に撮ってもらった写真ですが、こんな感じで誰も人が歩いてないという状況です。一番右側が上海用の、感染者でないことを示すバーコードです。日本でもご存知の方がおられるかと思いますが、アリババ、アリペイというネットキャッシングのシステムをやっている会社が作りましたアプリです。いま確認したら赤色になっていたのですが、赤色の時は外出禁止です。施設に入ってくださいという指示です。逆にこのバーコードが緑色になりますと、コロナ感染の疑いなし、濃厚接触もなしということで街中を移動できるようになります。3月時点ではこちらのバーコードをありとあらゆる場所で表示しろと言われてまして、警備員の方にこのバーコードを見せて、緑色だったら建物に入れたり、地下鉄やバスに乗れたりというルールになっていました。逆に言うと、これがないとどこにも行けません。日本ではcocoaというものがあっても非常に普及率が低いということですが、こちら辺のパワープレイ感がやはり中国だなと感じています。

コロナ下の世界の動きと私の動き ~19年12月から20年3月~

■会社そばの昼食をとるフードコート（3月）



左上の写真は、私のオフィスのそばにある商業ビルの中にあるフードコートですが、椅子を強引に減らしまして、また対面で座れないようになっています。こういった処置は日本でもされています。日本だとアクリル板が立っていたりしますが、中国は椅子を減らして座れなくしています。後ろの赤い方、ジャンパー着ていますが、当然空調も付いていないので、とても寒い中、コートを着てお昼ご飯を食べるといった感じでした。

右側は、先ほど申し上げた WHO のパンデミック 4 日後にあったフットサル場の写真です。この時は日本人の駐在員ばかりで、日本人しかいなかったです。中国の方はまだ怖いから出てきてなかったのですけれど

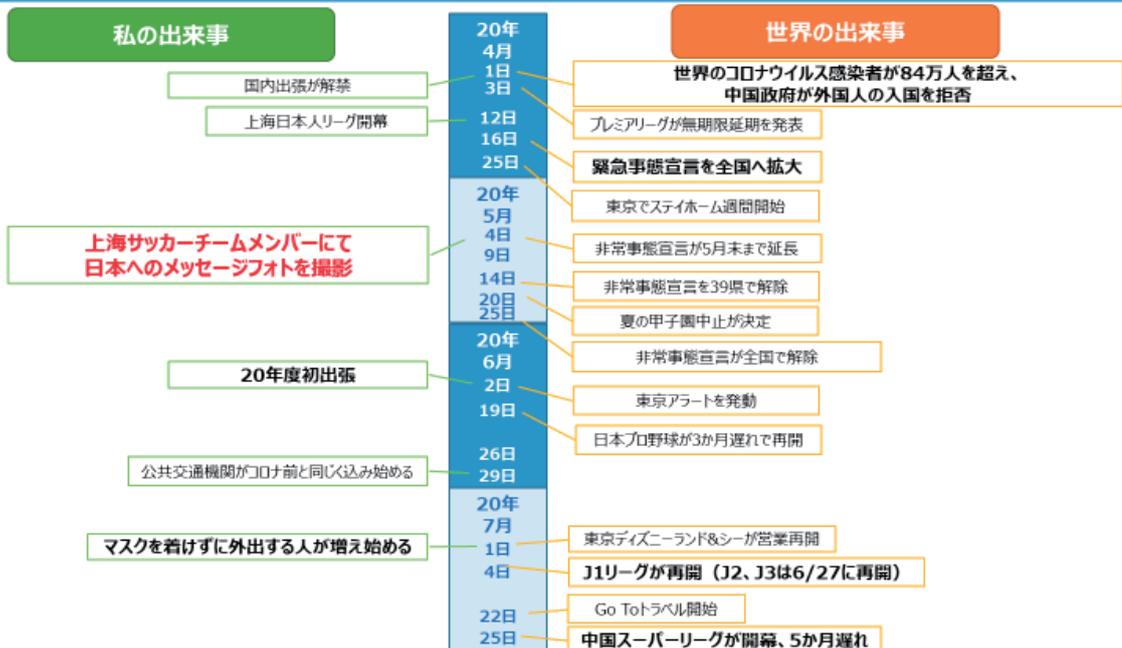
■再開したフットサルコートでの初日



も、我々のようにストレスの発散がサッカーになっている駐在のみんなで、やった！ということで飛び出して行きました。体温検査と、あと先程のバーコードを見せると入れるというルールです。またピッチに入れる人数に制限がありまして、フットサルコートは 5 人、もう一つ大きいコートは 8 名、それ以上はコートの中には入れないルールになっています。待っている人も 2 人までと決まっています、密にならないような工夫をされながらサッカーをしています。

この時は嬉しかったですね。隔離も含めて厳格にやられている中で、やっぱりスポーツによって心の安定がこれだけ保たれるのかということをものすごく感じた 1 日でした。

コロナ下の世界の動きと私の動き ~20年4月から7月~



こちら (p.41) が4月から5月をまとめたものです。この辺りから世界での動きが怪しくなってくるのですが、4月1日に中国政府が外国人の入国を全面的に禁止する決定をし、これによって私は日本に帰れなくなりました。日本に帰ることはできるのですが、事務所に戻れないということで、我々としては中国から実質出られない状況になったということです。その後、プレミアリーグが延期になったり、日本でも緊急事態宣言が出されたり、ステイホームという状況になっていきます。しかしこの頃は、私たちとしては国内出張も解禁され、日本人リーグって書いてありますがアマチュアサッカーリーグをやり出しまして、バーコードのチェックはあるのですが、通常通りの生活が徐々にでき始めておりました。その頃、サッカーチームのメンバーで日本へメッセージの写真を撮ろうということをやりました (p.31 写真)。6月に初めて出張に行き、7月も気温が上がってくるとマスクをつけずに歩いている人が出てくるように中国はなっていました。そのタイミングで7月に入ってからようやくJリーグが再開したり、GoTo トラベルが始まったり、日本も徐々に動かしていくという中、中国は7月の末に、プロリーグであるスーパーリーグが開幕しました。コロナの感染を抑えていたのですけれども、こういったスポーツイベントを開くことに関しては日本以上に慎重な姿勢をとっていたというのが中国の状況です。

p.31 の写真はご存知の通りJリーグ開幕です。無観客で試合をやったのが印象的でしたね。リモートマッチと呼んでいました。すごく印象的な出来事だったと思います。右側は、私の上海にいるサッカーチー

ム。おじさんチームから、日本のステイホームが始まったタイミングに、みんなで写真を撮って、日本のメンバーも入っているグループチャットに発信して、「隔離大変ですけど頑張ってください」と伝えました。やっぱりスポーツでつながっている仲間がいるのは本当に素晴らしいことだな、と感じた出来事ですので紹介させていただきます。

ここから8月から12月にかけての話です。8月に入りますと、コロナの感染者が上海でほぼゼロということで、マスクをつけずに歩いている状況になっていました。私もつけていませんでした。事務所の中でもつけません。公共交通機関に乗る時以外はマスクをつけないぐらいの生活になっていました。

その頃になると歌舞伎座が開いたり、Jリーグにお客さんを入れたりという流れが出てきていましたので、日本も徐々に戻ってきたのかなというようなタイミングで、私の祖父が体調を崩したということで、9月の末に一度日本に帰ることになりました。

この頃には外国人入国を禁止するルールはなくなっていました。隔離という拘束はありますが出入りはできる状況になっていたため、9月末のタイミングで帰国することになりました。

10月に帰国をし、門真市にありす東横インで2週間の隔離生活を送ることになりました。隔離生活があけて日本の自宅に戻り、その後はリモートワーク中心に仕事をしていました。そのタイミングで11月になってくるとヨーロッパで感染が再拡大し、イギリスやフランスなどでは2度目のロックダウンという状況



になっていきます。こちらは後で写真を付けて紹介させていただきます。

記憶にも新しい11月末の出来事ですが、日中の外相会談が開催され、日中韓のビジネス往来再開ということで合意しました。こちらのニュースは、一般の皆さまからすると往来再開という印象を持たれる方がおられるかと思うのですが、12月1日からはPCRと抗体検査の陰性証明を持っていないと飛行機に乗れませんということで、ルールがより厳しくなりました。実際に日本からの出張者の移動がOKになったという情報はいまの時点はありませんが、まずはPCRと抗体証明を取ってから乗ってください、という厳格なルールに決まりましたので、今週の月曜日(12/7)、日本の病院で検査を受けて、無事陰性ということになりまして上海に戻り、いまこちらの隔離施設に入って3回目の隔離を迎えております。

左の写真は、日本に帰国した際のホリデーインの部屋です。さっきお見せした部屋よりかなり狭いのがわかると思います。ただ日本の隔離は、中国と比べるとゆるゆるです。閑空に着いてから唾液によるPCR検査を受けて、陰性なので外に出られます。隔離と言

いつつ外出OKです。ホテルでは、公共の交通機関だけは乗らないでくださいと言われてまして、「食事はどうすればいいですか」と聞きますと、「朝食はパンを持って行きますけど昼と夜は自分でやってください」と言われ、駅前の王将とかすき家に普通に食べに行って普通に帰ってこられます。週末だったら居酒屋で一人でお酒を飲む分には問題ないということで。これで隔離かと思いつつながら、帰国してから2週間、ログを明確に取るということが目的になっているだけで、行動制限はないというのが日本の隔離です。ちなみに私は両親が教員をやっている関係でホテル隔離を選びましたが、選択肢としては自宅隔離もOKというのが今の日本のルールになっています。

右側は10月に帰る前の浦東空港の国際線乗り場の様子です。ご覧の通りほとんど人がいません。免税店も当然開いていませんでした。食堂が1軒開いているだけであとはもう全て閉まっています。もちろんお客さんもほとんどいません。1軒だけ店が開いていると、乗る人は少ないが全員そこに集まっちゃうのでお店が密だなと思ったりしましたが、中国は感染者が少ないので問題ないようです。

## コロナ下の世界の動きと私の動き ~20年8月から12月~

■日本帰国時の隔離先



■10月の浦東空港 国際線乗り場



次ページの写真は友人から送っていただきましたロンドンのロックダウン時の街中の様子です。見ての通り人が誰もいません。ロンドンロックダウンと言いきった以上、人が街中を歩かない状況まで行くのだな

と感じました。日本でここまでさすがにできないと感じましたので、比較としてロンドンの写真を挙げさせていただきます。

## コロナ下の世界の動きと私の動き ～20年8月から12月～

### ■ロックダウン時のロンドン



こちらは私が中国に帰ってくる時の様子です。左側の防護服を着た白い服を着ている人は CA さんです。普段だと綺麗な制服を着ている CA さんですが、全員防護服を着て眼鏡してマスクして目しか出ていない状態で機内食のサービスをしてくれますが、我々としてはあまりいい気分はしないです。しかしながら、やはり感染のリスクがあるということでこういう対応を取られています。ちなみに航空会社は中華系です。ANA とか JAL がどうなっているかわかりません。

右側は関西空港の出発ロビーです。普段は A から

H までカウンターがあって賑わっていますが、下の表示を見ていただくとわかるように、この日は夕方以降の便が 4 便だけということで、開いているカウンターも A から D の 4 つだけで残りは全部閉めています。フライトの本数も大幅に減っておりますので、大阪から上海に帰る便は火曜日 17 時 55 分の 1 本のみです。それを逃すと大阪に帰るのは一週間待たなければいけないくらい本数を絞っていますので、このくらい人がいない閑散とした状況になっていました。

## コロナ下の世界の動きと私の動き ～コロナ発生からパンデミックまで～

### ■防護服を着たCAが機内サービスを実施



こちら（次ページ）は到着後すぐ、空港の中に併設されている検査場の方に、左側の同意書とキットを持って PCR 検査をもう一度受けます。検査後は目的

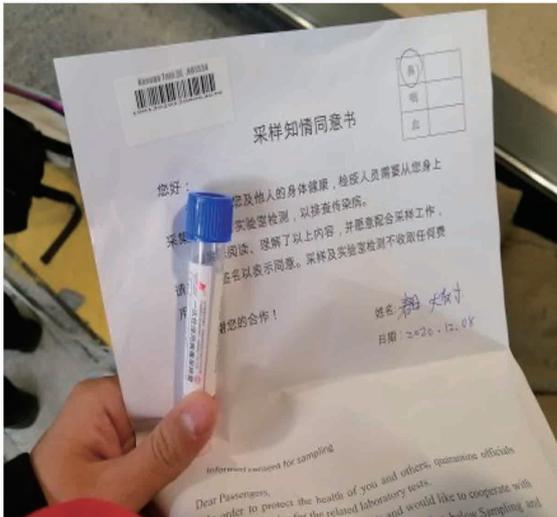
### ■関西空港出発ロビー（上）フライト案内（下）



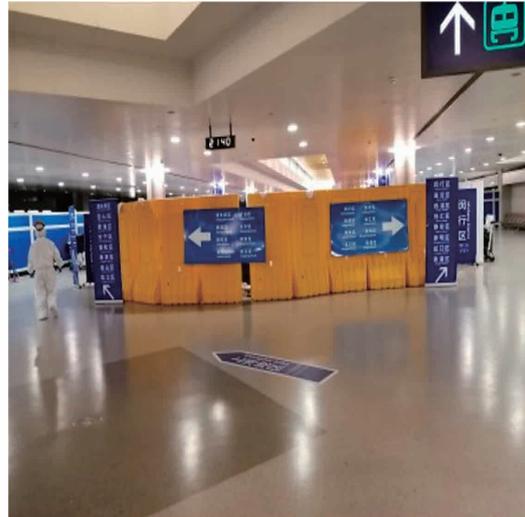
地に合わせて、目的地に一番近い隔離先に搬送されます。地区の名前がいろいろ出ていますが、上海市内のどの地区に行きますかということを知れまして、ど

コロナ下の世界の動きと私の動き ~20年8月から12月~

■ 到着後の浦東空港での PCR 検査



■ 隔離施設への移動バス待合



ここでですという風に答えて web で登録します。登録後、各地区がバリケードで区切られているところで搬送先に行くのを待つ、ということです。

ちなみに私は 17 時 55 分の大阪発の飛行機に乗りまして、上海の浦東空港に着陸したのは 19 時半。その後、いまの隔離施設に到着して部屋に入れたのは 25 時半で、非常に細かなチェックと、少ない人数を順繰りに対応しますので都度待たされます。会社の方に連絡をすると、1 時半はちょうど真ん中ぐらいで、時間がかかる場合だと朝の 4 時ということも平気であるようです。

このようにコロナに翻弄された 1 年間でしたが、振り返ってみますと国際線が中国→ドイツ、ドイツ→中国、中国→日本、日本→中国を 2 回の計 6 回、隔離生活は 3 回ということで、本当に制限がものすごくか

かっています。またフライトチケットもめっちゃめっちゃ高いです。私が帰りに乗った飛行機は片道で 30 万のチケットになっていました。本当に大変な状況になっています。

オンライン上のコミュニケーションが非常に増加したなと感じます。あとは中国の管理体制と日本の管理体制が、先ほど申し上げたように全然違うというところで、かなりギャップはありました。

最後になりますが、ボールが蹴れる、スポーツができるということが心の安定にどれだけ繋がるのかをすごく感じました。またスポーツのつながりがあったからこそ、メッセージ写真を撮ったような活動につながりますので、やはりスポーツの果たす意義はあるのかなと思っています。

今回、「With コロナ /After コロナ」なのでそこに向けてちょっと話をします。中国は既に With コロナ

コロナ下の1年を振り返って

- 国際線6回、隔離生活3回・・・移動に大幅な制限、お金がかかるようになった
- オンライン上でのコミュニケーションの増加
- 中国の管理体制と日本の管理体制の違いに戸惑う
- スポーツによる心の安定の大切さに気付く

- 中国はすでに「With コロナ」の第一歩を踏み出している
- 国単位でのコロナ対策での限界・・・国間で移動にはいずれも制限がかかる
- コロナ下でも「スポーツ」の果たす役割はある

というフローに入っているように感じています。医療は確立してないのですが、管理をするという部分ではかなりルールが明確になっていますので、うまくやれているというところですね。ただし、国単位で何かをやるには限界があると思います。移動にこれだけ制限がかかっている状態で新しい生活に踏み出しましたと言われてしまうと、私のような海外を拠点に生活をしている日本人からすると、本当に辛い状況です。そのため、やはり世界として、国単位ではなく、全体としてどうやって行くのかというところをみながらやっていかなければいけないというのが所感です。

最後に重ねて申し上げますが、やはりコロナ禍でのスポーツにおける心の安定、そういったものはものすごく意味があるのだということをものすごく感じました。午前中、コロナ禍でイベントをやることが紹介されていましたが、私は十分にやる意味があるということ、この1年間の生活を通して非常に感じました。

ということを最後にお伝えして、私のパートは以上にしようと思います。ご清聴ありがとうございました。

**中塚**：ありがとうございました。非常に貴重な報告ですね。写真も含めて。チャットの方に、小池さんから質問があります。たぶん簡単に答えられると思います。空港からホリデーインまでの移動は公共交通機関が使えなかったとすると、どのようにされたのでしょうかということですね。

**春日**：これは小池さん、中国の移動のことでしょうか。

**小池**：そうです。中国です。

**春日**：中国は先ほどの待合室で待たされて、全部で8人ずつぐらいのグループを作って、それぞれに1台、使っていない路面バスで搬送されます。もちろん公共交通機関には乗れないですね。

**小池**：春日さんのような人たち専用の交通機関が、国の方からアレンジされているということですね。

**春日**：おっしゃる通りです。特定の時間に飛んできている便がありまして、その中に乗っている人数を地区ごとに振り分けて、そこをまたさらに密にならないような人数に振り分けて、それぞれに1台ずつバスが

ついて順次運ばれるということですね。

**小池**：やっぱりその辺のアレンジがなかったら移動できないですね。

**春日**：そうですね。できないですね。自家用車なしは迎えに来てもらってくださいというルールです。中国は、どのバスに誰が乗ったかを特定しておかないと、どこかで感染が発覚した時の濃厚接触者が割り出せないなので、非常に厳格にそこはやっていますね。

**小池**：ありがとうございます。

**中塚**：ほかにもたぶんいっぱいお聞きしたいことがあると思います。私もたくさんありますが、忘れないうちにチャットの方に書き留めていただけないでしょうか。岸さんの話が終わった後のクロストークでまた取り上げたいと思います。どうもありがとうございました。

# 休み時間はアフリカに —A-GOALプロジェクトの挑戦

岸 卓巨

**中塚**：このコロナの中で、サロンのメンバーはさまざまな意欲的な取り組みをされています。その中で、皆さんもご存知だろうと思いますが、アフリカが大変なことになっているというところで「A-GOAL プロジェクト」という名の支援プロジェクトを立ち上げ、ものすごい勢いで動かしていたのが、NPO サロン事務局長の岸さんです。岸さんにはプロジェクトの話と、日常生活とどのように折り合いをつけながらやっていたのか、その辺りを話してもらいたいと思います。

**岸**：今回は、A-GOAL プロジェクトの代表という立場でお話をさせていただきます。シンポジウム第2部のテーマが「新しい日常」というところから考えますと、生活の中に日常と非日常がある中で、「休み時間」は「日常」の時間になるかと思います。そのような「日常」の時間を使って、アフリカの「非日常」な事態に対するサポートを行い、パンク寸前なのが私のコロナ禍での生活です。

今日はアフリカの話をするのですが、おそらく関心を持ってくださる方が少ないんじゃないかと思っています。というのは、先日、日本赤十字社が出した統計によると、コロナ禍での海外に対する寄付は日本国内に対する寄付よりすごく少なくて、わずか6%という調査結果が出ています。ここからも分かるように、海外の、特にアフリカの話は皆さんにとっては遠い話だと思うので、今日は少しでも身近に感じていただけるように日常的なところやスポーツの場面に紐付けながらお話ができればと思っています。

岸と申します。いまサロン 2002 では事務局長をやらせていただき、普段は日本アンチ・ドーピング機構で働いています。元々ケニアで協力隊として活動していました。その関係から、いろいろなアフリカとのつながりの活動をしていまして、「スポーツ」や「アフリカ」をキーワードに「心の豊かさ」を実現するための活動をしています。

理恵さんのお話の中でワーキングスタイルが変わったという話が大きかったと思いますが、アフリカでい

ま一番問題になっているのは失業者の問題です。本当にアフリカでは、コロナの影響で多くの人が仕事を失っている状況にあります。特に3月からロックダウンが色々な国で起きまして、感染者数に関してはアメリカとか他の地域に比べたら少ないですが、感染しなくても仕事を失ってしまうような、経済的なダメージが大きいというところがあります。ご存知の通り、アフリカの国々にはまだまだ低所得者が多くいますが、ほぼ貯金もない中で生活をしていると、仕事がなくなってしまうことですぐに食糧が得られない状況にもなっています。政府からのサポートも十分には期待できません。

このような状況に対して「A-GOAL プロジェクト」というプロジェクトを5月に立ち上げました。左側の赤い服を着ている人たちが、サッカークラブの指導者とか運営している人たちですね。



2020年5月16日 A-GOALプロジェクト キックオフ

彼らを通して地域の人たちに食料を渡すプロジェクトを始めました。日本からアフリカに、主にお金を送り、そのクラブが地域の人たちに食料だったり感染症予防の石鹸だったりマスクだったりを配るという活動です。

このプロジェクトをやりつつ、私の3月から11月までがどんな生活だったかというところをお話させていただきます。

3月に全世界のJICA ボランティアが一時帰国しました。彼らと一緒に、ケニアの子どもたちに奨学金を渡す活動もしていたので、そういった活動の見直し

- 3月：JICAボランティアの一時帰国。ケニアの奨学金制度の運営見直し。  
オリンピック・パラリンピック競技大会開催延期決定
- 4月：サロン2002初のオンライン月例会、在宅勤務開始  
ケニアの友人からのSOS「コロナの影響で食べるものにも困っている」
- 5月：A-GOALプロジェクト始動（ケニア）プロジェクトメンバー20名
- 6月：ナイジェリアに活動を展開（現地オリンピック委員会と連携）  
クラウドファンディング第1弾開始、プロジェクトメンバー50名  
オンラインミーティング 53回、Facebookライブ開始
- 7月：マラウイに活動を展開、プロジェクトメンバー70名
- 8月：高校生とのオンライン異文化交流プログラム開始  
クラウドファンディング第2弾開始（100万円）
- 9月：24時間チャリティーイベント実施
- 10月：JICAとの連携でのセミナー開催、幼稚園面接  
書籍「スポーツSDGs」発売開始
- 11月：クラウドファンディング第3弾開始、引っ越し

アフリカでのコロナ  
感染者100万人超

大幅に必要なになりました。また、日本アンチ・ドーピング機構で働いているので、東京オリンピック・パラリンピック競技大会延期というのも生活の中では非常に大きかったです。そして、サロン2002ではオンラインの月例会。私も在宅勤務がはじまりました。

そんな4月にケニアの友人、これはサッカークラブの指導をしている人ですが、その人から、コロナの影響で食べるものにも困っているというSOSが入りました。そしてA-GOALプロジェクトを始めました。20人ぐらいで始めましたが、その後人数は増えていき、支援地域も、6月にはケニアからナイジェリアに広げました。この活動は、主に日本人を中心とした皆さんからクラウドファンディングなどで寄付を募って実施しています。あと、アフリカに行けない中でプロジェクトを運営するためのオンラインミーティングが非常に多く、ほぼ毎日のはしごで、今回ケニアの人と話をしたら次はナイジェリア

の人と話をして、みたいな形で実施していました。本当にオンラインでできることが広がってきて、Facebook Liveというような、フェイスブックを使ったオンラインのイベントなどをしています。

7月からはマラウイという国でも活動を始めました。オンラインを活用する機会は増え、8月にはコロナの影響で、留学に行きたかったけど行けなかった高校生とA-GOALでつながっているアフリカの人達をオンラインでつないで交

流をするプログラムを、高校生の発案で始めました。クラウドファンディングについては第2弾という形で100万円を集め、これぐらいの時期にアフリカでの感染者数は100万人になりました。

9月、オンラインのイベントを24時間やるという、ちょっと無謀なチャレンジをしまして、100万円を集めることを目標に実施し、最後の最後で集まりました。あとJICAとのセミナーをやったり、子育ての方では幼稚園の面接が入ってきたり、私の専門分野であるスポーツのSDGsについて本を書いて販売したり。このような形で3月から11月はかなり怒涛の毎日を送っていました。

ちょっとA-GOALの話に戻ります。どんな形でやっているのかと言いますと、日本からアフリカの人達にまずお金を送ります。彼らは、日本で言う総合型地域スポーツクラブとかまちクラブの指導者です。Jリーグのようなトップ層ではない、学校の校庭を使ったりとか、地域の施設を使ってやっているようなクラブの人達が、自分達でスーパーなどで商品を購入して、それを地元の人たちに配るといった活動をしています。この図は、ケニアやナイジェリアのケースですが、マラウイは少し異なり、地域サッカークラブを拠点に農業プロジェクトをやっています。マラウイ湖国立公園という、もともと観光地であった場所では観光客が激減し、サッカーをしながら本業で観光業をやっていた人たちと、野菜を育て、地域の人たちに配布する活動を行っています。そのような形でいま、ケニア・マラウ

**支援実施方法②：地域住民に確実に支援を届けるために**



地元のスーパーなどで商品を購入



パッキング  
(1個=1000円程度)



住民を迎えるための  
セットアップ



住民への食糧配布・衛生用品配布



受益者による署名  
画像・報告書提出



**支援国：3カ国（ケニア・マラウイ・ナイジェリア）**  
**地域スポーツクラブ：15**  
**支援世帯数：1577世帯**  
**支援人数：7954名** (2020/12/12現在)

### アフリカのコロナ禍 GOAL探って

現地クラブ通じ、物資配布

サッカー少年、10千円 支援金集め

朝日新聞掲載 (2020.6.17夕刊)

イ・ナイジェリアの3か国、15のクラブと連携して活動しています。

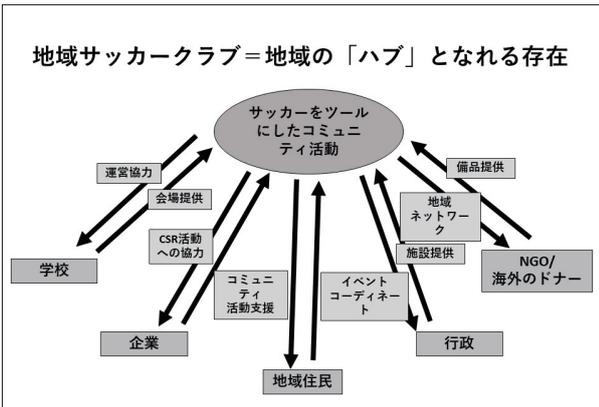
日本のメディアにも取り上げて頂きました。特徴的なのが、日本とオンラインで繋ぎながらこのプロジェクトを運営している部分かと思います。zoomとか Facebook のメッセージなどを使って、どここのクラブと連携するかを決めるための面接を行ったり、現地の様子を報告してもらいモニタリングしています。

先ほどお話しした 24 時間チャリティーライブに関しては、スポーツでアフリカと繋がろうということテーマに行いました。写真の中で見たことがある方もいらっしゃるかと思いますが、ワキウリさんというケニアのマラソンランナーとか、オルンガさんとか、サッカーや陸上や色々な形でアフリカに繋がる人たちに出演していただきイベントを開催しました。イベントの中ではリアルタイムでアフリカ各国の現場と中継を繋ぎ、オンラインツアーも実施しました。このようなこともコロナの中でオンラインのツールを活用することでできるようになったことかなと思います。

A-GOAL では、日本の農業の専門家とアフリカの現場をオンラインでつないで、農業の仕方を教えるようなこともやっています。あとはオルンガさんですね。いま Jリーグで得点王になっているオルンガさんと、ケニアの子ども達をオンラインでつないで、子ども達にメッセージを送ってもらうことをしました。

#### プロジェクトの進行方法

- ・オンラインコミュニケーションツールを活用 (Zoom、Facebookメッセージ)
- ・メンバーの大半は日本にいたため、遠隔にて支援先決定のインタビューやミーティング、モニタリングを行う。
- ・国境を越えて、アフリカの指導者同士の連携も促進



### スポーツを通じた国際協力

before コロナ	with/after コロナ
人・モノを送る	現地調達
答えは先進国にある	答えは現場にある
「教える」「支援する」	「繋ぐ」「助け合う」
支援者としての関わり	サポーターとしての関わり
スポーツの場面で支える	生活・地域から支える
プレーヤー中心	インクルーシブ
組織・単独	個人・連携
大規模・入念な準備	できることから
スポーツの尺度で評価	社会の尺度で評価

このような活動の中で感じていることとしては、非日常での支援活動における日常の大切さという部分です。これは、大きく分けて三つの点で感じています。

1つは、なぜスポーツクラブをハブにこの活動を始めたかという部分です。もともとアフリカのスポーツクラブでは日常的に、コロナになる前から、サッカーだけではなく、地域の、日本でいうホームタウン活動のようなことをしていました。犯罪防止や HIV 防止のためのワークショップを開催したり、地域の課題にアプローチするような活動です。そういう活動していると、地域の人とのつながりができてきます。そうすると、誰が地域の中で、このコロナの中で失業しているかとか、どこに障害のある方がいて、なかなか政府からの援助が受けられないとか、どこに孤児がいて、ということが本当に彼らが一番わかっています。そういう日常での地域活動をしている人たちと連携することによって、この短い期間でも多くの人達に食料を届けることができたということがあります。このように、スポーツクラブによる日常の活動が、今回のコロナ禍という非日常で生きてきたということがあります。

2つ目として、スポーツを通じた国際協力って、例えば JICA でもスポーツの指導者を送ったりスポーツ用具を支援したり大会の開催支援をしたりするのは多

く行われていますが、この「WITH コロナ /AFTER コロナ」になってより必要になってくるというのが、生活とか地域から支えるという「日常からの支援」かなと思っています。サッカー選手もスポーツの場面だけで生きているわけではなく、元々の生活自体がコロナの中で危うくなっているところがあるので、その生活の部分から支える、日常から支えるということが必要かと思います。

3つ目は、今回このプロジェクトをやるにあたって、多くの方に協力いただき、最大で 80 人くらいの方にプロジェクトのメンバーとして入っていただきました。アフリカの繋がりだったり JICA のつながり、スポーツのつながりなど色々ありますが、私がこれまでの日常生活の中で築いてきた信頼関係だったり、日常生活の中で築いてきたネットワークがこのプロジェクトにすごく紐付いているなと思います。非常事態になった時に、そういう日常的な部分で繋がっていた人たちが集まることができるんだということを強く感じました。そういう意味で、日常が非日常での活動に生きてくるところで考えています。

## ① With コロナの日常を支える



今後の展望についても日常・非日常を絡めながらお話しすると、日常から支えていくことが必要だと思います。いま食料が足りないというところは、今後改善していくかと思いますが、それだけじゃない。例えば医療に関しても、対処療法だけでなく予防も教えるということも必要です。右の絵は、日本の医者がやっている家庭医療の啓発プロジェクトと A-GOAL が連携しているところです。左下は女の子達に生理用品を配るところで、サッカーにきている女の子達なんですけど、コロナの中で生理用品が買えなくなったというのがありますし、元々のジェンダーの問題が、コロナの中でより顕在化しているというのがあります。そういった日常の問題を支えていく必要があるかなと思っています。

2つ目はどちらかというところだと日本の問題だと思いますが、日本でも災害があったり震災があったり、今後非日常的なトラブルが起きるリスクがあると思います。東日本大震災の時に海外から多くの支援が寄せられたように、A-GOAL プロジェクトを通じてもアフリカの人達とネットワークを作り、今後日本で起きた際には、彼らから日本が助けをもらうような関係性を構築できたらと思います。それこそ30年後、50年後になってくると、もしかしたら日本よりアフリカの方が発展しているかもしれません。日本が高齢化している社会であることを考えると、逆転していることもなくはないと思います。そういった時に助け合えるネットワークをこのプロジェクトを通じて作っていきたいと思っています。

最後は日常と非日常というところで、非日常の支援活動ばかりしていると日常がおろそかになりますので、この部分も自戒の念を込めて、家庭も大切にしつつバランスをとっていきなさいと思います。

**中塚**：ありがとうございました。途中機器トラブル

がありましたが、あれは非日常ではなく日常に起こり得るのだというところで。そういうのも「AFTER コロナ」では少しずつ乗り越えていくことになるのだろうと思いますね。

最後の日常と非日常のバランスは、常に私も感じているテーマです。どうでしょうか。岸さんの提起してくれた話題。もしかすると初めて聞かれる方もいらっしゃるかもしれませんが。まず岸さんのプレゼンで出てきたことに関して質問等ありましたらお願いします。どんなことでも構いません。あるいは補足がもしあれば…。

**岸**：せっかくなので浜野さん、声出せますか？自己紹介含めて感想とか伺えればと思います。

**浜野**：ご紹介に預かりました浜野大志と申します。同志社大学の3年生です。いま大正大学で教鞭を取られている林恒宏先生が代表されているピースボールアクションというNGOの団体があり、そこの活動をいま少し任されています。ピースボールアクションは、サッカーボールを日本から集めて途上国の子どもたちや日本の震災の被災地、親のいない家庭に届けるという活動をしています。僕は途上国の子どもたちにボールを届けることにすごく興味があって、色々紹介があり、アフリカのウガンダの方に少しコネクションができ、そこにサッカーボールを来年の8月あたりを目処に届けたいと考えております。僕の自己紹介はそれぐらいですね。

感想としては、僕自身、いまサッカーボールだけを届けようとしていて、そこの生活の基盤であったり、それこそ目の前の課題、食料とか明日を生きるためのお金であったりとか、そういうところがすごくアフリカでは逼迫しているんだなって思いました。僕自身アフリカに行ったことがなくて、まだ何も知らない状態でこのような現地の話を聞く機会はすごく重要だなって今日は思いました。ありがとうございました。

**岸**：ありがとうございます。私が浜野さんを応援しているのはサッカーボールを送るだけじゃなくて、一緒に絵本を届けようっていうことでやっていて、サッカーだけじゃない、生活と言うか日常の部分にもサポートをしようっていう活動なので。そういうプロジェクトも今後増えていったらいいなという風に思っているところです。

**中塚**：ありがとうございます。そもそもこのコロナになった時、オープニングのムービーでも紹介されましたが、「生きるだけでなくともよいが、よりよく生きるには欠かせない文化であるスポーツやアート」、そのように我々は捉えています、「生きる」というところに関して、ものすごく切羽詰まった状況にある人たちが世界中にいる。たぶん国内にもいっぱいいるんじゃないかと思うんです。そういう観点から、やはりこのコロナで気づかされたこと。リモートワークはできるかもしれないけど、エッセンシャルワーカーはリモートワークができないわけで、現場で体張ってる人たちがいっぱいいるわけですよ。そういうことにも気づかされたこの1年かなと思います。

残り時間はあまりありませんが、感想なり補足なりをしていただけると。私の方からは是非、笹原さんにはコメントを頂きたいと考えております。他の方からも、質問も含めて。チャットに書いていただいてもいいですけど、コメントいただければと思います。

春日さんは上海に勤務してようやくいま上海に戻った立場ですが、笹原さんは日揮のマンマー支店長として着任したけど、コロナで帰国を余儀なくされ、未だ鎌倉ですよ。

**笹原**：はい、鎌倉の自宅でございます。

**中塚**：そういった観点からちょっと補足及び感想をいただければと。

**笹原**：補足することは特にはないですけども、やはり皆さんの話を聞いていて、コロナの中で生活が非常に変わってしまった、その変わった生活を利用するか影響を軽減するとか楽しむとか、そういったことをやっているのは非常に興味深く聞きました。私は皆さんに影響を与えることは大してなくて、自分の足の怪我を治すリハビリがコロナで会社に行かなくなったのでよくできたとか、そういったことはあるのですが、本当に皆さん他の人に影響を与える、他の人を巻き込むような形での活動をされている方が沢山いるというのは非常に興味深く聞きました。ありがとうございます。

**中塚**：ありがとうございます。他の方からいかがですか。感想でも構わないんですが、第1部で八戸からお話しいただいた土谷さんが戻ってこられています。土谷さん、話聞こえてます？もしもし土谷さん？

**土谷**：はい、聞こえてます。まさに撤収中でございます。

**中塚**：あーそうですか。

**土谷**：ラジオ代わりにいまずっと聞いていまして、

**中塚**：そうすると岸さんが最後に示された「BEFORE コロナと WITH/AFTER コロナ」の対比の図はご覧になってないですね。

**土谷**：ごめんなさい。絵は見てなかった。

**中塚**：そうですか。岸さんもう1回出してもらえますか (p.50 右下スライド)。午前中にも話しましたが、「これまでのスポーツとこれからのスポーツ」というものと「これまでのアートとこれからのアート」がかなり重なっているというところで土谷さんと意気投合した話を紹介しました。岸さんが「BEFORE コロナと WITH/AFTER コロナ」をこのような形で整理してくれました。これを見て土谷さんはどのようにコメントしてくれるかな、と思っていたのですがどうでしょうか。

**土谷**：なるほど。自律共生社会っていう感じがしますね。それぞれが、個々が自立してそれが共生していくような社会なのかなと思いますね。

**中塚**：「答えは先進国にある」から「答えは現場にある」というところ岸さんもう少し補足してもらえないですか。

**岸**：もともと国際協力は、先進国が答えを持っていて、それを教えるみたいな形の、教えるとか与えるみたいなのが一般的だったと思うのですが、それが今後は、どちらかという現場に答えがあり、それが繋がってない人達につなげる、みたいな部分が必要なんじゃないかと思います。いわゆる現場の中で、そこがうまく行き渡ってなかったり、そのグループに入れていなかったり、という人たちが結構いたりするので、助け合い、現場の中でプレイヤー同士をつなぐというのがすごく大事だという話です。

**土谷**：素晴らしいですね。ヴァナキュラーってことですね。

**中塚**：土谷さんは、いろんなローカルに出向き、今回は八戸、日常的には高知県佐川市、どんどこ相撲もいろんな商店街だったり、そういうローカルな現場に立ち会っていろんな活動をされています。それももしかすると、ローカルなところすでにある、だけど眠っている何かを引っ張り出すことに繋がっているのかなと、そんな気がするんですけど。

**土谷**：そうですね。まあ現場現場で形骸化しちゃっているものをもう一度目覚めさせるような仕事かなと思っと思っていますけれども。

**中塚**：そういう意味では、岸さんが言っているようなことと繋がってきますよね。

**土谷**：そうですね。要するに啓蒙的なものではなくて、その土地その土地のそのヴァナキュラーなところから着手していくようなものになっているという風に思えますね。要するに、グローバルみたいな幻想から覚めた方がいいんじゃないかっていうことで、岸さんが表してくれたようなところは非常にこれから有効かなとは思っています。

**中塚**：ありがとうございます。むちゃぶりにお答えいただきまして。片付けの方が大変だろうと思いますが進めてください。

**土谷**：はいどうも。

**中塚**：そろそろ私が発信しているこのお店も、少しずつ賑やかになってきました。隣のブースにお客さんが入ってきて、始まろうとしているところです。そろそろお開きの時間が近づいています。3名の演者から締めコメントをお一人ずつ。理恵さん、春日さん、岸さんの順でいただき、この場を締めたいと思います。じゃあ田中理恵さんからよろしいでしょうか。

**田中**：皆さん今日はどうもありがとうございました。他の方たちの広い活動を見て、結構私は手元の活動だったなあと思いながらお聞きしていました。できることからやってみようという動き自体は全体の流れ

となっているのかなと思いますが、これを機にあまり動かなかった人達が多くなったという意味では、私がやっていたことも意味があるのかなと思いつつ、先に繋げてできればと思います。よろしく申し上げます。以上です。

**中塚**：では春日さん、お願いします。

**春日**：今日は貴重なお時間いただきまして、中塚理事長はじめサロンの皆さん本当にありがとうございました。私からは二つあります。一つ目は、私この1年間は、申しあげた通り、コロナウイルスに奔走された1年間です。何か新しいことを始めようとか、この状況だからこうしてみようというようなことを考える余裕もなく、半ば強引な部分も含め、日本と中国を行き来するような状況になっていました。なのでそういった生活の中で、改めて日常的にできていたことが本当に素晴らしい事なんだなというのを再確認できました。ボールが蹴れること、集まってサッカーができること、また集まった誰かと食事が取れること、家族に日本に帰って会えること。こういったことが本当に素晴らしい事なんだということを本当に再確認したということがまず大きいかなと。なので、まだまだ岸さんや理恵さんのステップにはまだ私は行ってませんが、そこはすごく感じたところです。

二つ目は、理恵さん、岸さんの方に行くためにはとこのところを含めてなんですけれども、少し想像力をもう少し働かせてやっていくことが大事なのかなと。コロナで私は状況的に厳しかったので自分のことで手一杯だったところもありますが、この状況の中で他はどうなっているんだろうとか、何かできないことないかとか。この余裕が、コロナの状況の回復具合によって、人それぞれでたぶん変わってくる中で、そうなった時に初めて他の人や他の事に少し想像力を持って、何か動くということが、きっと新しい「AFTER コロナ」の世界を作っていけるんじゃないかというところがあると思います。まず2週間頑張っってこの隔離から出た後はそんなことも意識しながら活動できたらなと思います。今日はありがとうございました。

**岸**：1点私からお伝え、お話しさせていただくと、今回の案内文に「スポーツというのは生きるだけでなくもいいが」という話がかかれていましたけれども、生きるためにもスポーツが必要ではないかと私は強く感じています。A-GOALでは、スポーツのネッ

トワークを活用して生活を支える食料を届けていますが、それだけではなく、日本でもコロナ禍で自殺率が高まったり、障害者が社会に参加するのがより難しくなったりしているところもあると思います。そういった時にスポーツが果たせる役割はすごく大きいのではないかと思います。よりよく生きるというよりも、もっともっと人の人生の根幹にアプローチできるものではないかと思っています。引き続きよろしくをお願いします。

**中塚**：どうもありがとうございました。まだまだ議論も続けたいところですが、一旦シンポジウムとしてはここでお開きにしたいと思います。

冒頭申し上げましたが、このシンポジウムの中身は活字にして報告書の形でまとめます。それをサロンのホームページと広報誌に掲載します。その段階で、発言していただいた方にチェックをお願いすることになるかと思いますがご協力をお願いします。なおサロンのホームページには、公開シンポジウムだったり月例会の過去の報告がたくさん載っています。午前中、本多さんから U-18 フットサルの取り組みの話もありまし

たが、その経過も報告書にまとまっています。是非お目通しいただければ。そして我々「スポーツを通してのゆたかなくらしづくり」という“志”で引き続き活動を続けて参ります。いろんな人がつながるのも原動力になっていきますので、是非皆さんもご入会を！

というところでこの会をおしまいにしたいと思います。

本当にどうもありがとうございました。また今後ともよろしくをお願いします。ありがとうございます。

引き続きオンライン懇親会へ

